

## ロシア語における *nibud'*-words の分布について

エブセエバ エレナ

### 1. はじめに

本稿では、ロシア語 indefinites (不定表現<sup>1</sup>)のうち、PSIs (Polarity Sensitive Items; 極性表現)の一種として分類されることの多い *nibud'*-words<sup>2</sup>について、irrealis nonspecific (非現実態非特定)や、monotone decreasing (単調減少)、nonveridical (非真実)環境での使用、dependent variable (従属変数)としての振る舞いへの着目等、*nibud'*-words を扱っている先行研究における分析の主な観点をまず整理する。そしていずれの先行研究においても、*nibud'*-words が同節否定辞と共に否定スコープ内に解釈される場合がある点については十分な記述を欠くという不備があった点を指摘する(2節)。

その後、そのような場合について考察する上で参考になる英語と日本語に関する先行研究の要点をまとめる(3節)。

続いて *nibud'*-words の分布について、肯定文の場合と否定文の場合に分けて、それぞれを下位分類し、考察を行う。特に、後者については、従来ほとんど注意されてこなかった、否定スコープ内に *nibud'*-words が解釈される場合を中心に、*nibud'*-words の生起可能環境について、詳しい記述を行う(4節)。

そして最後に、3節で記述したように *nibud'*-words が否定スコープ内解釈を通常は受けないがある種の環境でそれが可能である点について、機能的観点を取り入れた考察を行う(5節)。

<sup>1</sup> 本稿では indefinites の訳として「不定表現」という術語を用いる。なお本稿の主な分析対象である *nibud'*-words は伝統的には「不定代名詞(neopredelennye mestoimenija)」の一種として扱われている。

<sup>2</sup> *kto-nibud'* (who-*nibud'*; 誰か) や *cto-nidud'* (what-*nibud'*; 何か) のように、wh 要素に *nibud'* という要素を後接させることにより形成される語を、本稿では *nibud'*-words と呼ぶ。また同様に、ロシア語 *gde-libo* (where-*libo*; どこか)、*nikto (ni\_who*; 誰も(～ない))、*cto-to* (what-*to*; 何か)、英語 *somewhere* (どこか)、セルボクロアチア語 *i(t)ko (i(t)-who*; 誰か)、日本語「何か (what-*ka*)」のような indefinites をそれぞれ、*libo*-words、*ni*-words、*to*-words、*some*-words、*i*-words、*ka*-words のように呼ぶ(英語 *some*-words のように wh 以外の要素と結びついている場合も含める)。

2. 関連先行研究

2.1. 意味論的マップを用いた言語類型論的研究

Haspelmath(1997)は、用法を言語普遍的に整理するための意味論的含意マップ(implicational map)上で、諸言語の各不定表現がどの範囲に広がって用いられるか、その分布状況を整理した研究である。それまで個別言語や少数の言語の不定表現の用法の対照研究はあったが、100にもおよぶ言語からのサンプルをとり、うち40言語についてマップ上で用法分布を整理するといった規模で言語類型論的な研究を行ったのが Haspelmath(1997)である。ここで英語、ロシア語、日本語の indefinites の分布を整理した図を Haspelmath(1997:65,71,75)から引用すると、次の通りである。

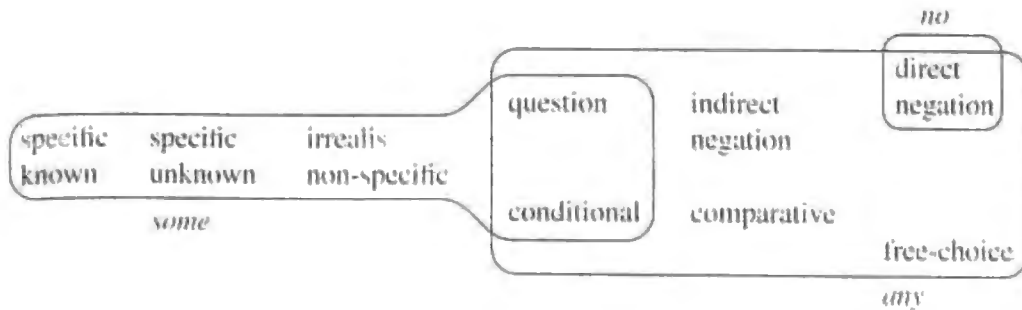


図1 Haspelmath(1997:65)による英語不定表現の意味論的含意マップ

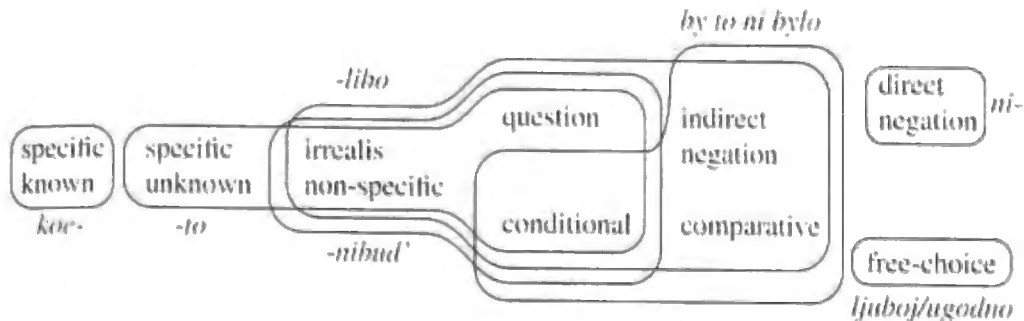


図2 Haspelmath(1997:71)によるロシア語不定表現の意味論的含意マップ

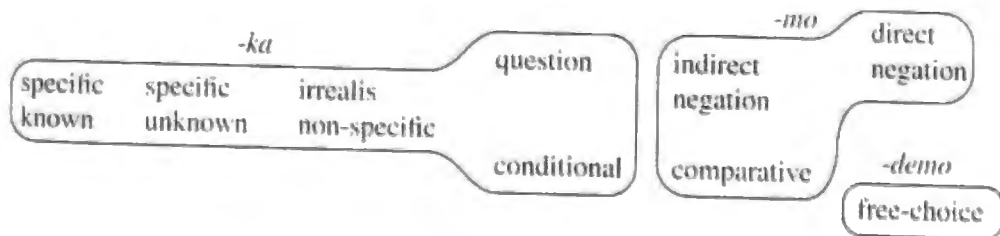


図3 Haspelmath(1997:75)による日本語不定表現の意味論的含意マップ

このような大規模な言語類型論的研究により、明らかになったことは非常に

多いのであるが、一方で問題点として指摘しておかなければならないのは、マップ上で図を描く基礎となる、個々の言語の *indefinites* の使用可能性に関するデータに関し、過度の単純化が行われている点である。ここでは、後の議論とかかわるものとして、英語 *some*-words、ロシア語 *nibud'*-words、日本語 *ka*-words について、否定とかかわりどのような記述が行われているかをその一例としてみておきたい。

まず *some*-words について稀ではあるが(1)のように同節否定(*clausemate negation*)環境での使用があることが指摘されているのはよいことである。

- (1) Niklas didn't see something. (Everyone else saw it, only Niklas missed it.) (Haspelmath 1997:44 (93))

その場合、否定よりも *some*-words の方がスコープの広い解釈<sup>3</sup>しかありえないとしているのは、基本的分布の記述としてはただしい。しかし、後にみるようにある種の環境では、*some*-words の方が否定よりも狭い解釈<sup>4</sup>もあるうことがすでに以前の先行研究(Baker 1970 等)で問題とされているのに、そのような点にまったく言及がなく図を描いているのはやはり不十分な観察にもとづく一般化と言える。

ロシア語 *nibud'*-words、日本語 *ka*-words に関しても同様の問題点が指摘できる。日本語の *ka*-words について Haspelmath(1997:85)は、以下のように Hasegawa(1991:271)から(2)の例を引き、(3)のように述べた後、McGloin(1976)から(4)の例を引き、否定疑問文では(3)の制約が緩み、*ka*-words が用いられることがある点に言及しているだけである。

- (2)a. Dare-ka ki-ta.

b. Dare-mo / \* dare-ka ko-nakat-ta.

- (3) In contrast to English, where the *some*-series is possible in negative sentences but is then interpreted as not being in the scope of the negation, the Japanese *ka*-series is completely impossible with negation, where the *mo*-series obligatory.

- (4) Nani-ka tabe-mas-en-ka?

<sup>3</sup> (1)の文の、否定よりも *some*-words の方がスコープの広い解釈とは、「ニクラスが見なかったものがある」場合、真となるような解釈である。このようなスコープ関係を、存在量化( $\exists$ )と否定( $\neg$ )の論理記号を用い、 $\exists > \neg$  のように表すことができる。

<sup>4</sup> (1)の文の、*some*-words の方が否定よりもスコープの狭い解釈とは、「ニクラスが見たものはない」場合(つまり、「ニクラスが何も見なかった」場合)に真となるような解釈である。このようなスコープ関係を、 $\neg > \exists$  のように表すことができる(ド・モルガンの法則により、全称量化( $\forall$ )と否定の論理記号を用いるなら、 $\forall > \neg$  のように表せるスコープ関係の場合と同値である)。

ロシア語 *nibud'*-words についても、後に詳しく論じる通り、英語 *some*-words に関する Baker(1970)等の指摘や日本語 PPIs に関する服部(1989)の指摘同様、否定文において生起ししかも否定よりも狭いスコープ解釈の行われる例が存在するのだが、Haspelmath(1997)ではそのような可能性については全く言及がない。

この点、Haspelmath(1997)の研究をもとに全称詞も含めた量化詞について研究を行った Tatevosov(2002:141)でも、ロシア語 indefinites について、それぞれの…-words の用法の広がりがあるものの、意味論的含意マップ上でまとめとして掲げられている図は次のようなもので、上で Haspelmath(1997)について述べた問題点は依然引き継がれたままである。

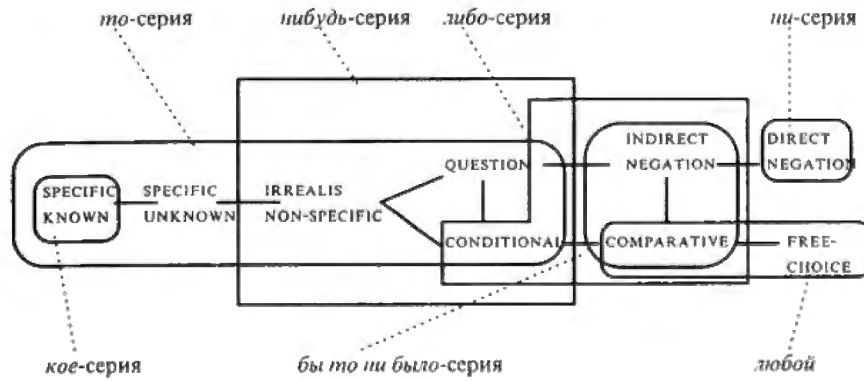


図 4 Tatevosov(2002:141)によるロシア語不定表現の意味論的含意マップ

## 2.2. 従来の統語論的意味論的アプローチにおける *nibud'*-words の主な分析

生成文法の流れの中でロシア語 *nibud'*-words を分析した研究のうち、ここではまず統語論的アプローチの例として Brown&Franks(1995)・Brown(1999)における扱いの要点をまとめる(2.2.1.節)。また意味論的アプローチの例として Pereltsvaig(2000)における単調性(monotonicity)に基づくアプローチと真実性(veridicality)に基づくアプローチとの比較の要点をまとめる(2.2.2.節)。続いて近年の意味論的アプローチの例として、Yanovich(2005)と Pereltsvaig(2008)の要点をまとめる(2.2.3.節)。また、通常同節否定環境では用いられないとされる *nibud'*-words が同節否定辞と共に共起する場合について、先行研究で言及されることのあった場合としては、有形の否定辞が生起しているが意味的には否定が無いに等しい、いわゆる pleonastic/expletive(冗語的/虚)な否定文での使用可能性(Brown&Franks

1995、Brown1999 等；本稿 2.2.4.節)が時にあった。しかしそれを別にすると、“attenuated”とされる否定文での狭いスコープ解釈の可能性への言及(Brown 1999；本稿 2.2.4.節)がわずかに存在するだけであることをみる。

### 2.2.1. 統語論的アプローチにおける *nibud'*-words の分析例：両極性

Brown&Franks(1995)は、諸言語の PSIs を一般化束縛原理により分析する Progovac(1994)を受け<sup>5</sup>、ロシア語 *nibud'*-words を束縛原理 B(「局所領域内で自由でなければならない」；この点では PPI 的)と「束縛されねばならない」という NPI に関する一般制約(この点では NPI 的)の両者に従う表現として記述している。また Progovac(1994)等の先行研究同様、*nibud'*-words を束縛し認可する要素として有形の上位節の否定辞だけでなく、音形を持たない Op(極性オペレータ要素)を Spec 位置に想定することがある。そのような扱いにより、*nibud'*-words が通常、同節否定環境では現れず(束縛原理 B による)、上位節否定(superordinate negation)、さらには、Y-N 疑問(Yes-No questions)・条件(conditionals)・否定的述語(adversative predicates)等、否定辞 *ne* が現れない種々の環境(これらの環境では Op が想定される)で現れる点が分析されるのである。Brown(1999)はそのような Brown&Franks(1995)の分析を、チョムスキー統語論・極小主義の枠組みで定式化した研究である。

### 2.2.2. 極性表現分析に関する二種の意味論的アプローチ：MBA と VBA

有形の否定要素が現れない文でも用いられることのある NPIs(van der Wouden(1997)等のいう medium NPIs や weak NPIs<sup>6</sup>がそうである)がどのように認可されるかを説明するため、2.2.1.節であげた先行研究では、音形を持たない抽象的極性オペレータ(Op)を Spec 位置に想定するのである。しかし、そのようなアプローチについては、それら強くない NPIs が認可される諸環境にどのような共通点があるかが理論的枠組みの外に置かれ、ad hoc な扱いがなされるという欠点がある。そのような欠点を克服するものとして、意味論アプローチからこれまでに提案されている大きな二つの理論の流れに、monotonicity-based approach<sup>7</sup> (MBA) と veridicality-based

<sup>5</sup> Progovac(1994)では、ロシア語 *ni*-words は SS(Surface Structure)と LF(Logical Form)間で上昇しない、束縛原理 A(「局所領域内で束縛されねばならない」)に従う NPI 要素として扱われる(同節否定環境以外では認可されない)。また *to*-words は、(局所領域内での非束縛を要求する束縛原理 B だけでなく)束縛原理 C(「自由でなければならない」)を満たす必要のある PPI 要素として分析されている。

<sup>6</sup> 他方原則同節否定環境で用いられるロシア語 *ni*-words は strong NPIs の一種である。

<sup>7</sup> 単調性にもとづくアプローチである(Ladusaw(1980)等)。そこでは単調減少性(研究者により、単調減少性と同じ性質を指すのに、下方含意(Downward Entailment)という術語を用いる場合がある)が広範囲の NPIs の認可条件を規定する上で重要な役割を担う。



approach<sup>8</sup>(VBA)とがある。

そのような二つの流れを受け Pereltsvaig(2000)は、ロシア語の *ni*-words、*libo*-words、*nibud'*-words が生起可能／不可能なのはそれぞれどのような場合かを整理し、その分布を説明する上で MBA と VBA、どちらが有効であるかについて比較している。掲げられた諸例文の文法性判断(*libo*-words の生起は、*ni*-words の生起環境である同節否定以外の weak NPI 環境、つまり単調減少環境とほぼ一致している。*nibud'*-words の生起は話者間での相違があるものの weak NPI 環境の一部とは重なりながらも weak NPI 環境以外でも生起し、またそれは nonveridical 環境とも一致しないとされている)から、*libo*-words の分布に関しては VBA の方がより有効であるとされる。また、*ni*-words が認可される同節否定環境<sup>9</sup>において *libo*-words が認可されない点(この点は *nibud'*-words も同じとされ、“bagel problem” と呼ばれる)を、分散形態論の枠組みを用い阻止(blocking)が起こったものとして分析している<sup>10</sup>。

また否定スコープ内で解釈される *nibud'*-words の可能性について一切触れられていない点は、Pereltsvaig(2000)においても同様である。

### 2.2.3. 近年の意味論的アプローチ：スコープの広域化と従属変数性

Yanovich(2005)はロシア語 indefinites のうち、*to*-words と *nibud'*-words をとりあげ、それぞれの意味を、一般化選択関数(Generalized Choice Function)とそのスコールム化された<sup>11</sup>ものとして記述している。そのこと

<sup>8</sup> 真実性にもとづくアプローチ; Zwarts(1995)、Giannakidou(1998)等; そこでは非真実性が広い範囲の PSIs の認可条件を規定する上で重要な役割を担う。

<sup>9</sup> なお *ni*-words の認可環境を同節否定という統語的条件ではなく、antimorphic 環境という意味的条件に置き換えることができない点も論じられている。

<sup>10</sup> ただ、Pereltsvaig(2000)が考察の根拠としてあげるロシア語例文については、文法性判断に関し、あるいは掲げられた例が代表するとされる文の範囲に関し、疑問を抱かざるをえない箇所が諸所あることを指摘しておきたい。例えば文法性判断について一例をあげると、*libo*-words が同節否定文で認可されないとして掲げられた例文(ia)については、語順および主語を変えた(ib)のような例を考えれば自然な文となる。

- (i)a. \*On kogo-libo ne vstretil. (=Pereltsvaig 2000 (6))  
 he whom-libo not met “He didn’t meet anyone.”  
 b. Ja ne vstretil tam kogo-libo.  
 I not met there whom-libo  
 私はあそこで誰とも会わなかった。

つまり、Pereltsvaig(2000)が結論を得る上で基となっている、(虚でない)同節否定環境での *libo*-words の反認可や、単調減少環境での *libo*-words と *ni*-words の相補分布という記述は、そもそも誤りを含んでおり、それをもとに導かれた結論の妥当性についても疑問を抱かざるをえないのである。

<sup>11</sup> 選択関数とは、(空でない)集合を引数とし、集合のメンバーを返す関数である。ある種の indefinites(specific indefinites)を含む文の解釈として、スコープ上の島(scopal island)から抜け出したかのような、広いスコープ解釈が可能となる点を説明するため、通常の quantifiers を扱うの

により *to* -words が最も広いスコープをとった解釈でのみ用いられること、また *nibud'*-words が単純に過去の出来事を述べた単純文では現れることができず、それを認可してくれるオペレータのもとでのみ現れ、スコープ関係としてはそのようなオペレータ(のうち最も外側にあるもの)より狭い解釈しかできないことが説明できるとしている。

また同様に Pereltsvaig(2008)は、Farkas(1997)による *variables* の3種への下位区分(*individuals* か *situations* か *worlds* か)および *variables* 間の依存関係への着目というアイデアに従った上で、*nibud'* -words を *domain variable* と共変動する *dependent variable* として捉える分析を提示している。

(5) ...variables may be dependent or not, and the former are dependent on a domain variable, where dependency is understood as in [27].

(6)(=[27]) A variable  $v_2$  is dependent on a variable  $v_1$  iff the values assigned to  $v_2$  co-vary with those assigned to  $v_1$ . In such cases  $v_2$  is a dependent variable, and  $v_1$  is its domain variable.

(Farkus 1997:253)

(7)a. \*Ego o čëm-nibud' sprosili.

him about what-nibud' asked.PL

'They asked him about something.'

b. Každogo o čëm-nibud' sprosili.

everybody.ACC about what-nibud' asked.PL

'They asked everybody about something.' [ $\forall \exists, * \exists \forall$ ]

(Pereltsvaig 2008:370)

とは異なる意味論的メカニズムとして導入されたものである(Reinhart(1997)等)。例えば、(i)の文については、(ii)のような解釈も可能であり、それは、通常スコープ上の島として振る舞う *if* 節から、*a certain* という (*specific*) *indefinite* が抜け出しのような解釈になっている。

(i) If a certain professor is talking, Peter will go to the conference.

(ii) There is a professor such that, if he is talking, Peter will go to the conference.

また、*indefinites* の中には、*scopal island* から抜け出しながらも、最も広いスコープをとることはできず、より広いスコープをとる要素に従属し、"intermediate scope"をとる要素(Yanovich(2005)等はロシア語 *nibud'*-words をそのような要素として分析している)がある。そのような *indefinites* を分析するのに、Reinhart(1997)は選択関数変数として扱い、最上位のスコープ位置だけでなく、任意のスコープ位置で *existential closure* 可能とする分析を行っている。他の分析法として、選択関数の引数を、集合だけでなく個体(これはより広いスコープをとるオペレータに束縛された変数であってよい)をもとる二項とし、集合のメンバーを返す "スコールム化された" 選択関数(Skolemized Choice Function)が導入される場合がある(Kratzer(1998), Yanovich(2005)等)。

そのような捉え方により、*domain variable* が導入されない(7a)は非適格文となり、(7b)では *každogo* を *domain variable* とする配分的、つまりこの例なら質問相手ごとに異なることをたずねてよい読み(∀ヨ)しか適格にならないことが説明されるとしている。

Yanovich(2005)、Pereltsvaig(2008)はいずれも、*nibud'*-words が認可される一見多様な環境が、単調減少や非真実といった見方ではうまく統一的に捉えられなかったのを、スコアレム化された選択関数、あるいは従属変数という見方で統一的に分析しようという興味深い研究である。しかし、どのような上位のオペレータ、あるいは *domain variables* が *nibud'*-words を認可できるのかについては、さらに追究を行う必要があると考えられる。また、本稿が注目する *nibud'*-words の否定スコープ内解釈については、Yanovich(2005)、Pereltsvaig(2008)のいずれにおいても言及はない。

#### 2.2.4. expletive negation 構文における *nibud'*-words について

Brown&Franks(1995)、Brown(1999)は、次の ⟨i⟩ ~ ⟨iii⟩ のような例を、同節否定辞 *ne* と共起しても意味的には否定が無いに等しく、また通常と同節否定環境とは逆に、*ni*-words が認可されず、*nibud'*-words を用いることが可能になる canonical expletive negation 環境の例として挙げている。

⟨i⟩ *chut'ne ...* や *poka ... ne* のような節<sup>12</sup>

(8) ...*poka ne poluchu vashego/kakogo-nibud'/\*nikakogo otveta...*

until NEG receive [your /which-any /\*no\_which answer]<sub>GEN</sub>

“...until I receive your/some/\*no answer...” (Brown1999: 96 (7))

<sup>12</sup> *poka* 節については二つの種類を区別する必要がある。(どちらの場合も *nibud'*-words は否定より広いスコープを取れない点で共通している。)一つ目は Brown&Franks(1995)、Brown(1999)が扱っている、*ni*-words への置き換えが不可能で明らかに expletive negation 構文である *poka* 節である。そしてもう一つは、以下のような例で代表され、*nibud'*-words が生じ得るのは述語が完了体の場合のみである。なお、この場合時制は過去である点に注意されたい。このタイプの構文では述語のタイプに関係なく *ni*-words が可能である。

(i) Davai s'edim etot tort poka *kto-nibud' / nikto ne prishel.*

let's eat this cake until who-*nibud'* ni\_who NEG came

誰かが来る前にこのケーキを食べましょう。

(ii) Davai s'edim etot tort poka *\*kogo-nibud' / nikogo net.*

let's eat this cake until who-*nibud'* ni-who NEG

誰もいない間にこのケーキを食べましょう。

しかし、このタイプの *poka* 節において *nibud'*-words の解釈は時制に依存している等の点で、このタイプの構文は本稿で考察する他の構文と異なっていて、その扱いに関しては保留しておきたい。



〈ii〉 恐れや不安をあらわす *kak by*、*chtoby* 節

(9) Ja bojus', kak by kto-nibud' /\*nikto ne narushil eksperimenta.  
I fear how SUBJ.P. who-any \*no\_who NEG ruined experiment<sub>GEN</sub>  
“I'm afraid someone might ruin the experiment” (Brown1999:96(8))

〈iii〉 ある種<sup>13</sup>の *li* Yes-No 疑問文、*ne* V が文頭に移動した Yes-No 疑問文

(10) Ne vyzyvaet li pobeda kadetov kakix-nibud' /\*nikakixbeporjadkov?  
NEG cause Q victory of-cadets [which-any /\*no\_which disturbances]<sub>GEN</sub>  
“Could it be that the cadet victory is causing disturbances?”  
(Brown1999:108(38))

expletive negation 節は否定辞を含んではいても意味的には否定ではなく、否定オペレータが想定されることもないことをもとに、これらの例で *ni*-words が用いられず *nibud'*-words が使用可能である点は説明されると述べられている<sup>14</sup>。

さて本節の最後に、Brown(1999)が expletive negation 構文で *nibud'*-words が使用可能である点を分析した後、その脚注の中でごく簡単に言及している例文を〈iv〉として引用しておきたい。

〈iv〉“attenuated”な否定文の例(kogda により抽象的に表現された普遍量化詞のスコープ内に否定がある場合の、*nibud'*-word の狭スコープ解釈使用例)

(11) ..on xodit k bufetchiche, kogda ona ne zanjata s kem-nibud'drugim.  
he goes to waitress when she NEG busy with who-any another  
“.. he goes to the waitress's place, when(ever) she's not busy with someone else.”  
(Brown 1999: 96 fn. 3)

上の例は、Brown&Franks(1995)では掲げられておらず、Brown(1999)ではそのような例の存在がこの1例をあげるだけでごく簡単に脚注でふれられている。この例では意味的にやはり否定が虚ではなく存在している。本稿の主な注目点は、まさにこの例のような、意味的に否定が虚ではない同節

<sup>13</sup> Restan(1969)を参考に、ロシア語 Y-N 疑問文を 1. informative、2. rhetorical、3. dubious、4. presumptive、5. emotional に分けた場合、*li* Y-N 疑問文にすることが可能なのは 1.~3.であり、それらは、否定された場合に否定の含意が生まれる 4.や 5.とは違い、expletive negation としての使用が可能であると、Brown(1999)は述べている。

<sup>14</sup> また、(8)~(10)の gloss 中で[]で囲んだ名詞句は、ロシア語例文中で生格になっており意味的に虚な否定辞であっても、生格は認可される点もあわせて分析されている。

さらに、*li*を伴わないある種の Yes-No 疑問文では、有形否定辞が expletive negation になるかどうかは随意的であり、時に *nibud'*-words、時に *ni*-words が用いられることがある点にもふれられている。

否定環境で生起し、狭いスコープ解釈の行われる *nibud'*-words の使用環境の広がり詳しく記述する点にある。

本稿の主眼は、従来の研究でほぼ見落とされていた否定スコープ内解釈の可能性を含め、*nibud'*-words 使用条件をより十全に記述することにあるため、従来の諸分析の優劣を批判的に検討し、代替となる理論的分析を提供することは行わない<sup>15</sup>。

### 3. Second-instance negation 環境における PPI の否定スコープ内解釈

先行研究では、英語の *some*-words や日本語の *ka*-words やロシア語の *nibud'*-words といった要素は否定とともに使われた場合、必ず否定より広いスコープを取るとしている研究があるのを先にみた。本節ではまず英語と日本語に関し、そうした要素が否定スコープ内に解釈され得る場合について考察した研究が存在することを紹介する。それは後に 4.2. 節で、*nibud'*-words も直接否定と共起できないというのは過度の単純化であり、否定スコープ内解釈の可能な環境が存在していることを示す際に参考となるからである。

#### 3.1. Baker(1970)

Baker(1970)は一般的に PPI とされる表現が否定と共起する場合があると指摘し、そうしたケースをいわゆる二重否定(double-negative)構文と pseudo-negative 構文(「特別な述語(special predicates)」)とに分け、そうした構文では PPI は含意を通して認可されるとしている。

PPI については、Baker(1970)が多く例を挙げているように、同節否定辞と共起していても、次の(12b)のように、さらに上位の節に NPI を認可できる表現が現れている場合、用いられることがある。

(12) a. \*John doesn't STILL play golf.

b. You can't convince me that John doesn't STILL play golf.

なお、通常ならありえない、*some*-words が否定スコープ内に解釈されることを許す環境としては、上位節に否定辞等 NPI を認可する表現がくる上のような場合よりもさらに広く(cf. (13)(14))、「特別な述語(special predicates)」がくる場合があることを、Baker(1970: 182ff.)は述べている((15))。Baker(1970)の言う「特別な述語(special predicates)」とは、その成立が<期待>されたり<恐れ>られたり<希望>されたりしていた事態

<sup>15</sup> また残念ながら紙数の制限から、先行研究における扱いの要点、問題点に断片的に触れる以外、*ni*-words、*libo*-words、*to*-words の使用条件を詳しく記述し、*nibud'*-words の使用条件と比較する余裕もない。

が成立しなかったことに関する、〈驚き〉や〈安堵〉や〈失望〉を表現するような述語のことである。

(13) I am surprised that someone hasn't already said something.

(14) John is relieved that someone didn't sign up ahead of him.

(15) Speaking intuitively, we can say that each of these predicates expresses a relation of contrariness between a certain fact and some mental or emotional state. For example, we say that we are *surprised* when a certain fact does not conform to our *expectations*; *relieved* when it does not conform to our *fears*; *disappointed* when it is not in line with our *hopes*.

Baker(1970)が極性表現の分布を説明するために行った提案の中には、Klima(1964)以来の統語論的アプローチにおいて重視される統語構造条件(cf. (16))に加え、意味-語用論的アプローチにおいて肯定的であれ批判的であれ言及されることの多い *entailment* 関係にもとづく条件(cf. (17))が含まれている。

(16) Negative-polarity items are appropriate within the scope of negations, whereas affirmative-polarity items are appropriate elsewhere. (Baker 1970:(47a))

(17) Given semantic representations P1 and P2 satisfying the following conditions:

(A) P1 = X1 Y Z1 and P2 = X2 Y Z2, where Y is itself a well-formed semantic representation;

(B) P1 entails P2;

then the lexical representation appropriate to Y in P2 (by [(16)]) is also appropriate to Y in P1. (Baker 1970:(47b))

(17)によれば例えば、P1にあたる(13)中の *already* や *some-word*(Yにあたる)が適格であるのは、(13)は P2 にあたる(18)を含意しており、(18)中の *already* や *some-word* が適格であることから(13)中の *already* や *some-word* も適格であるのだという説明が行われているわけである(cf. Horn 1989: 494-496)。

(13) I'm surprised that someone hasn't already said something to you. (再掲)

- (18) I expected that someone would have already said something to you.  
(Horn 1989: 495(41'a))

### 3.2. Horn(1989)

Horn(1989)では英語に関し、*some*-words が否定のスコープ内に解釈される例について論じていて、Baker (1970)の分析にも触れている。Horn(1989)、Horn&Lee(1995)によれば、メタ言語否定(エコー的文脈や対比的文脈等)<sup>16</sup>では、次の(19)-(21)のように、否定の方が *some*-words よりスコープが広い解釈をとる場合がある。

- (19) I DON'T sometimes turn in my assignments late.  
(Horn&Lee 1995:407(40a))

- (20) Chris didn't manage to solve {**some/#any**} of the problems — he managed to solve **all** of them (Horn1989:370(13b),374(25))

- (21)a. A sociopath wouldn't get through the first ten minutes of my films. They are too slow. Someone isn't killed in the credits.  
(from a newspaper interview with Brian de Palma)
- b. She swung round, she took two strides to him, waiting for someone to stop her, but someone didn't. (from John Le Carré's *The Little Drummer Girl*) (Horn1989:494(40a,b))

Baker (1970)の(17)の条件について Horn(1989)は、P1 が P2 を含意し P2 において極性表現 Y が適格であっても、P1 における極性表現 Y が適格であるとは限らないという問題が存在することを示すため、(22)(23)のような文を掲げ、(22)は(23)を含意しており、(23)における *already* や *some*-words の使用は適格であるが、(22)の文は不自然であるといった例が存在することを指摘している。

- (22) #She denied that someone hasn't already said something to you.

- (23) She said that someone has already said something to you.  
(Horn 1989:496)

---

<sup>16</sup> メタ言語否定(metalinguistic negation)について例えば Horn(1989:363)は、“a device for objecting to a previous utterance on any grounds whatever, including the conventional or conversational implicature it potentially induces, its morphology, its style or register, or its phonetic realization” と説明している。



(13)(18)のペアと(22)(23)のペアの間に見られる、このような違いに関し Horn(1989)は、次のように述べている。

(24) Baker's framework fails to incorporate the correct generalizations about the set of entailments that license polarity shift. What is crucial here is the dimension of emotivity Baker alludes to in the passage cited above[(15)];

つまり、例外的に PPI が認可されるケースについて、その背景にあり認可を支えていると考えられる含意(entailment)関係にある表現を適切に捉えるためには、(15)の引用中でも Baker(1970)が言及している「心的あるいは感情の状態(some mental or emotional state)」の次元に目を配ることが肝要だというのである。(22)から(23)への含意は、そのような感情性を欠いた含意であるため、同節否定辞の共起に伴う PPI の anti-licensing を解除するのには不十分だというのである。

さらに、Horn(1989)はこうしたタイプの構文は、背景にある「心的あるいは感情の状態」以外は、統語的に見て特別であるわけではないと指摘し、Baker (1970)のいう「特別な述語(special predicates)」がなくても、*some-words* が認可されている(21)や以下のような例をあげる。

- (25)a. This is incredible. You mean to tell me that someone hasn't already spoken to you about the party?!
- b. What a relief—this must be my lucky day. Evidently someone hasn't sighed up ahead of me after all!

(Horn 1989:496(45))

なお、Horn(1989:496-503)は、当該タイプの構文において通常否定と共起しない要素などが現れ得る点や、特別なイントネーションを伴うことがある点などから、当該構文はメタ言語的あるいは二次的否定(metalinguistic or second-instance negation)の一種だとしている。

また、*some-words* の否定スコープ内解釈に関しては統語論的制約は認められないとしていると同時に、そうした解釈は強く文脈などに依存していると認めざるを得ないと述べている。そして、(*everybody* などと比べると)*some-words* が一般的にメタ言語否定であっても否定スコープ内に解釈されにくい傾向があるのは、機能的動機付けを持つ、阻止効果(blocking effect)によるものである<sup>17</sup>という見方をとっている(Horn 1989: 496-503)。

---

<sup>17</sup> Horn(1989:499)は、“...the strength of this blocking effect varies inversely with the

### 3.3. 服部(1989)

日本語に関する関連先行研究としては服部(1989)がある。

服部(1989)は、「誰か」「少し」「多少」「殆ど」「かなり」「相当」「よほど」「時々」「たまに」「そろそろ」「一くらい」のような、「(「すべて」「全員」「常に」「非常に」等とは対照的に)無標単文「Pない」において否定の作用を受けにくい((26),(27)を参照)とされている要素が、否定の作用を受ける(つまり否定よりも狭いスコープをとる)環境があると指摘している。そして、そのような環境として条件、二重否定、予想外、理由、訂正・反駁などを挙げ、いずれも、「Pという事柄に予め話者の着目があるような環境」という共通点があるという指摘を行っている。

(26) 全部(は)解けなかった。 (Neg > Q, Q > Neg(ハのない場合))

(27) 殆ど(は)解けなかった。 (Q > Neg)

(28) 誰かがその仕事をやらないと皆が困る。(条件)

(29) 殆どの回路がつぶれない限りこのシステムは動き続ける。

(30) よほど被害が大きくならなければ大丈夫だ。

(31) 時々喧嘩をしないような兄弟はいない。(二重否定)

(32) 昨日の空襲で殆ど壊滅しなかった工場は一つもなかった。

(33) ?この時間になっても誰かが出てこないのはおかしい。(予想外)

(34) 時々見回りに行かないからこんな間違いが起こる。(理由)

(35) 誰かに行き先を知らせておかなかったので大騒ぎになった。

(36) 弟にお菓子を少し残しておいてやらなかったので後で恨まれた。

(37) A: 客はかなり入りましたか?

B: ?かなり(は)入らなかった。(訂正・反駁)

## 4. *nibud'*-words の分布の記述の詳細化

本節では本稿が対象とする要素について、先行研究の記述を補う形で、ロシア語における *nibud'*-words の分布をまとめる。

### 4.1. 肯定文での認可環境について

*nibud'*-words が認可されないのは、典型的な現実態文、とりわけ、過去または進行中の現在の肯定平叙文においてである<sup>18</sup>

---

markedness of the alternative expressions. Since *not everybody* is morphologically and syntactically more marked than *nobody*, it will have a relatively weak restrictive effect on the use of (48a) (“Everybody didn’t come.”) to convey its potential NEG-Q meaning.”として、*nobody* のような対応語彙表現を持たない *somebody* を含む、“Somebody didn’t come.”の方が、NEG-Q 解釈、つまり本稿のいう否定スコープ内解釈をもちにくい理由について述べている。

<sup>18</sup> こうしたコンテキストでは指示対象の存在や *idenifiability* がおのずと前提になっているため、

共起不可能な述語のタイプ：

- ・ 過去一回きりの具体的な動作・事態を表す述語
- ・ 動作の進行・継続を表している述語(過去、現在)

一方、*nibud'*-words の典型的な認可環境としては、配分コンテキスト(4.1.1.)と非現実態コンテキスト(4.1.2.)とが挙げられる。

#### 4.1.1. 配分(distributive)コンテキスト

配分(distributive)コンテキストは大きく(i)と(ii)の2タイプに分けられる。

〈i〉 多回的・習慣的イベントを表す述語

多回的・習慣的イベントを表す節において、過去形、現在形、未来形ともに *nibud'*-words の使用が可能である<sup>19</sup>。このコンテキストでは、過去または進行中の現在の肯定平叙文であっても *nibud'*-words が認可される(例えば、進行中の動作を表している(38b)と定期的に繰り返されている文脈の文法的な(38a)を比較)。

(38)a. On postojanno *chto-nibud'* smotrit po televizoru.

he constantly what-*nibud'* watch on television

彼はいつも何かをテレビで見ている。

b. \*On seichas *chto-nibud'* smotrit po televizoru.

he right\_now what-*nibud'* watch on television

彼は今何かをテレビで見ている。

〈ii〉 主語が配分キーにあたる量化詞によりマークされていて目的語に不定名詞句が現れているような場合<sup>20</sup>

(39) Vse oni *chto-nibud'* chitali, kogda ja zashel v komnatu.

all they what-*nibud'* read when I entered in room

私が部屋に入った時に、彼らは皆何かを読んでいた。

ロシア語ではこうした文脈のための専用の specific な indefinites(*to*-words)が使われる。一方、英語の *some*-words や日本語の *ka*-words は Haspelmath (1997)の言う *realis non-specific* なコンテキストでも生じ得るため、この点ではロシア語とは分布を異にし、こうした文脈でも文法的である。<sup>19</sup> 代表的には多回性、習慣性を表すような副詞句 *chasto* 'frequently', *postojanno* 'constantly', *vsegda* 'always' や determiner *kazhdyi* 'every' などの要素は *nibud'*-words が多回的・習慣的イベントの間に配分されているような配分(distributive)文脈を作る。ただし、そうした要素が文中になくても、文脈上多回的・習慣的イベントであれば、*nibud'*-words が認可される。

<sup>20</sup> Haspelmath (1997)によれば、ここで挙げたような例は、発話時において進行しているイベントを表している以上、不定代名詞によって表されている対象の存在が前提となっていることがある。しかし、不定代名詞によって表されている対象が主語('everybody')が指している対象の間に配分されているので、UNIQUE ではない、したがって、non-specific であると見なされる。

なお、どちらのコンテキスト(〈i〉, 〈ii〉)でも、具体的な数(具体的な回数、人数(cf. *troe* ‘three’ (40a))や回数程度を表している *neskol’ko raz* ‘several times’ の場合は、*nibud’*-words は共起しにくい。とりわけ、具体的な数字(2以上)が可能なのは、(40b)のように人数(回数)などがもともと多い場合に限られ、そのような場合には non-specific な読みが可能になるため、*nibud’*-words が使用可能である。

(40)a. \**Troe iz nih chto-nibud’chitali, kogda ja zashel v komnatu.*

three from them what-nibud’ read when I entered in room

私が部屋に入った時、彼らの中の3人は何かを読んでいた。

b. *20 iz 100 chelovek chto-nibud’chitali, kogda ja zashel v komnatu.*

20 from 100 people what-nibud’ read when I entered in room

私が部屋に入った時、100人の中の20人は何かを読んでいた。

#### 4.1.2. 非現実態(irrealis)コンテキスト

非現実態(irrealis)コンテキストは大きく〈i〉~〈iv〉の4タイプに分けられる。

〈i〉 後続事象型動詞が取る補部

*hotet’* ‘want’ などの意志動詞をはじめ、*sobirat’sja* ‘be going’, *obeshat’* ‘promise’ などの主語制御動詞の補文、*prosit’* / *poprosit’* ‘ask’, *ugovorit’* ‘persuade’ をはじめとする目的語制御動詞の補文において、または、*chtoby* 節において認可される。

(41) *Ona poprosila menja kupit’ chto-nibud’na rynke.*

she asked me buy what-nibud’ on market

彼女は私に市場で何かを買うように頼んだ。

〈ii〉 命令形

(42) *Kupi mne kakuju-nibud’ gazetetu.*

buy me which-nibud’ paper

私に何か新聞を買ってください。

〈iii〉 モダリティ構文

*mozhno, mozhet* ‘can’ や *dolzhen, nado, neobhodimo* ‘must’ などを含むような構文は *nibud’*-words を認可する環境となる。これらの要素は deontic modality とともに epistemic modality も表すことができる(例えば、以下の(43)は二通りの解釈がある)。また、認識論的モダリティ(epistemic modality)を表す副詞を含む命題も irrealis として見なされ、過去または進



行中の現在の文であっても、*nibud'*-words が認可される。

(43) *Kto-nibud' dolzhen emu ob etom skazat'.*

who-*nibud'* must to\_him about it say

誰かが彼にこれを言うべきである。(言わなければならない)

誰かが彼にこれを言うに違いない。

(44) *Skoree vsego, on tam chto-nibud' kupil.*

faster of\_all he there what-*nibud'* bought

おそらく、彼はそこで何かを買ったでしょう。

〈iv〉 未来形文において(future sentences)。

未来形の節は一種のモダリティ要素を含むと考えることもできる。((45) は話し手の確信を表しているのである。)

(45) *On chto-nibud' pridumaet.*

he what-*nibud'* will\_think\_up(invent)

彼は何かを考えつくだろう。

#### 4.1.3. 疑問文

*nibud'*-words は疑問文において認可されると認められている。Haspelmath (1997)では疑問文での認可可能性はいわゆる Yes-No 疑問文、つまり、polarity が焦点となる疑問文をもとに判断されるとの記述がある。以下ではそれ以外の疑問文や、明示的な疑問文の標識 *li* を含む疑問文について考察する。

(46) *Zvonil li Sasha komu-nibud'?*

called Q Sasha to\_whom-*nibud'*

サーシャは誰かに電話をしましたか?

*li* は動詞と結合するだけでなく、名詞や他の品詞とも結合できる(cf.(47b))。そして、(47)に示されているように、*li* が動詞と結合している場合に限って *nibud'*-words が認可され、*li* が名詞句や他の動詞以外の品詞と結合していれば、*nibud'*-words は認可されないのである。なお、*li* が動詞と結合していても、フォーカスを極性を表す動詞以外の要素に当てることができるが、その際も *nibud'*-words は認可されないのである。例えば、以下の(47a)ではフォーカスが *Sasha* にあった場合は(47b)と同じ判断になる。要するに、疑問文においても述語以外の要素が疑問のフォーカスになっている場合は、述語が表している事柄自体は specific であるので、*nibud'*-words は基本的に認可されないのだと考えられる。

(47)a. Tol'ko ona znaet, zvonil li Sasha komu-nibud'.

only she knows called Q Sasha to\_whom-nibud'

彼女だけはサーシャが誰かに電話をしたかどうかを知っている。

b. \*Tol'ko ona znaet, Sasha li zvonil komu-nibud'.

only she knows Sasha Q called to\_whom-nibud'

彼女だけは誰かに電話をしたのがサーシャかどうかを知っている。

これに対して、Wh 疑問文は non-specific の環境にあたらぬので、以下の *nibud'*-words が可能であるレトリックな読みを除けば、典型的な Wh-疑問文において *nibud'*-words は認可されないとされている。

(48) Komu on chto-nibud' kupil?

to\_whom he what-nibud' bought

彼は誰に何かを買ってくれたの?

配分コンテキストを作るような Wh-要素(*skol'ko* 'how many', *v kakie dni nedeli* 'what days of the week' など)は *nibud'*-words を認可する(cf.(49))。なお、少なくともロシア語では、以下の例で示されているように、Wh-要素が主語(cf.(50))もしくは時間(cf.(24),(51))を表す場合に、*nibud'*-words が文法的である場合がある。こうした例では述語が表す動作の成立が厳密な意味で前提になっているわけではなく、また話者が *nibud'*-words によって表わされている対象を特定できないといった文脈が背景にあると考えることによって、述語によって表わされている事態が non-specific である点で、Yes-No 疑問文と類似していると言える。

(49) Skol'ko chelovek ob etom chto-nibud' znajet?

how\_many people about it what-nibud' knows

それについて何かを知っているのは何人ですか?

(50) Kto iz vas znaet ob etom chto-nibud'?

who from you knows about it what-nibud'

あなたたちの中でそれについて何かを知っている人は誰ですか?

(51) Kogda ty v poslednii raz byl gde-nibud' za granitsei?

when you in last time were where-nibud' abroad

あなたはいつ最後に外国のどこかへ行ったの?

なお、適切なコンテキストがあれば、*kto*, *kogda* 以外の Wh-要素の疑問文においても *nibud'*-words が多少不自然ながらも認可され得る。

(52) S kem iz etih ljudei u vas byli kakie-*nibud'* kontakty

with whom from these people at you were which-*nibud'* contacts

v proshlom godu?

in last year

これらの人の中であなたは去年誰と何らかのコンタクトを取ったことがあるの?

次節では *nibud'*-words が否定のスコープ内に解釈され得ることを示す。

#### 4.2. *nibud'*-words が否定スコープ内に解釈される環境

本節ではロシア語の *nibud'*-words はどういった環境において否定スコープ内に解釈されうるかについて考察する。

##### 4.2.1. 事態の評価を表す述語 1 (*nibud'*-words の否定スコープ内解釈の可能性が述語の意味に因らないタイプ(定節+定節))

まず一つの大きなグループとして、Baker (1970)のいう「特別な述語 (special predicates)」が挙げられる<sup>21</sup>。そのような構文の特徴として、以下の点 (i)~(vi) が挙げられる：

〈i〉主文述語は補文述語の事態の評価を表し、その評価としては好意的、批判的、いずれの評価も可能である。(それぞれ(53)と(54)、(55)と(56)を比較) 意味的には (a) 意外性 (*stranno* 'strange', *udivitel'no* 'funny/astonishing', *podozritel'no* 'suspicious'), (b) 批判 (*ploho* 'bad', *stydno* 'shame', *zhal'* 'pity'), (c) 好意的評価 (*horosho* 'good', *slava bogu* 'glory to god', *byt' radym* 'be glad'), (d) 期待 (*nadejat'sja* 'hope'), (e) 恐れ (*bojat'sja* 'be afraid') 等などがある。

〈ii〉当該の構文では *nibud'*-words は否定辞より広いスコープを取れない。

〈iii〉補文中には否定辞がなければ、*nibud'*-words は認可されない(cf.(57))。

〈iv〉同様の評価が単純な副詞句によって表わされている場合は、単一節と

<sup>21</sup>本節で取り上げられている述語の中には、話者の不安・心配等を表すような、いわゆる *adversative predicate* も含まれている。一般的には、そうした述語が取る補部において NPI、つまり、本来否定を含む環境において認可される表現が認可されることが問題になる。しかし、本節で取り上げられている述語は *adversative predicate* とは限らない。また、*nibud'*-words 自体が本来否定的な環境において認可されない。なお、ここで問題としている節は *adversative predicate* であっても補文に明示的な否定辞を含んでいて、否定とのスコープ関係が問題になってくることから、ここでは *adversative predicate* を特別扱いしないことにする。

なお、先行研究では *pleonastic negation* との関係で問題になる *adversative predicate* は、基本的に *kak by* 'how SUBJ.P.', *chtoby* 'that SUBJ.P.' といった *complementizer* の補文をとるのは対照的に、本節で取り上げている *complementizer* は *cto* 'that' である点に注意されたい。要するに、意味的には *adversative predicate* であっても、*pleonastic negation* が関係しないわけである。

同じように、*nibud'*-words の認可はきわめて困難である(cf.(58))。

- (53) Stranno / udivitel'no / podozritel'no, chto ona ne kupilatam  
 strange            astonishing            suspicious            that    she    NEG    bought    there  
*chto-nibud'*  
 what-*nibud'*  
 彼女があそこで何かを買わなかったのは不思議だ(意外だ/怪しい)。
- (54) Ne udivitel'no, chto ona ne kupila tam *chto-nibud'*  
 not    astonishing    that    she    NEG    bought    there    what-*nibud'*  
 彼女があそこで何も(lit.何かを)買わなかったのは不思議ではない。
- (55) Ploho / zhal',            chto *kto-nibud'* iz nih ne prishel.  
 bad        it\_is\_a\_pity        that    who-*nibud'*        from them    NEG    came  
 (彼らの中で)誰も(lit.誰か)来なかったのはよくない(残念だ)。
- (56) Horosho / slava bogu / ja rada,    chto *kto-nibud'* iz nih ne prishel.  
 good            glory    to\_god    I am\_glad    that    who-*nibud'*        from them    NEG    came  
 (彼らの中で)誰も(lit.誰か)来なかったのは、よかった(嬉しい)。
- (57) \*Horosho, chto *kto-nibud'* iz nih prishel.  
 good            that    who-*nibud'*        from them        came  
 (彼らの中で)誰かが来て、よかった。
- (58) ???K schast'ju / k sozhaleniju, ona ne kupila tam *chto-nibud'*  
 to happiness        to pity                            she    NEG    bought    there    what-*nibud'*  
 幸い/残念ながら、彼女はあそこで何も(lit.何かを)買わなかった。

〈v〉「評価」は話者のものである必要はない。以下の例に見られるように、主節の主語が三人称であっても、補文中の *nibud'*-words は認可される。また、英語の(65),(66)に見られるように、第三者の視点に立ったような評価もよく見られる。

- (59) On byl udivlen tem,            chto ona ne kupila tam *chto-nibud'*  
 he    was surprised    by\_the\_fact    that    she    NEG    bought    there    what-*nibud'*  
 彼は彼女があそこで何かを買わなかったことに驚いた。
- (60) On ne udivilsja tomu,            chto ona ne kupila tam *chto-nibud'*  
 he    NEG    surprised    to\_the\_fact        that    she    NEG    bought    there    what-*nibud'*  
 彼は彼女があそこ何か買わなかったことに驚かなかった。

〈vi〉 *znat'* / *uznat'* 'know' のような、補文に[+realis]を取る動詞の補文中では通常なら *nibud'*-words は認可されない(cf.(62))。しかし、その構文自体をさらに当該の述語のタイプに埋め込むと、*nibud'*-words は認可される。



- (61) On byl udivlen, uznava, chto ona ne kupila tam *chto-nibud'*.  
 he was surprised having\_learned that she NEG bought there what-*nibud'*  
 彼は彼女があそこで何かを買わなかったと知って驚いた。
- (62) \*On uznal, chto ona ne kupila tam *chto-nibud'*.  
 he learned that she NEG bought there what-*nibud'*  
 彼は彼女があそこで何かを買わなかったと知った。

また、英語でもロシア語と同じように、このタイプの述語は基本的に *some-words* を認可している。一方、日本語では、話者によって判断は分かれるが、こうした構文で *ka-words* は認可されにくいと言える。また、日本語はロシア語と同様、「話者の評価」が副詞によって表わされる場合は、*ka-words* は否定スコープ内に解釈されないのである。この点は英語と異なっている。

- (63) She hoped that he didn't buy something stupid.  
 (64) They found it hard to believe that somebody did not know.  
 (65) It's just amazing that somebody did not get hurt, and there was no property damage.  
 (66) This guy is lucky that somebody did not pull a gun from behind the counter and shoot him.
- (67) ?~OK 彼はあそこで何かを買わなくてよかった。  
 (68) \*~OK 彼はあそこで何かを買わなかったのは残念だ。  
 (69) ?~OK 彼はうちの店で何かを買ってくれないのは何となくさびしい。  
 (70) ?~OK 彼は私たちがあの店で何かを買わなかったことに驚いた。  
 (71) #残念ながら彼はあの店で何かを買わなかった。

#### 4.2.2. ‘否定的’ 主文述語が取る従属文

本節で考察する構文は、主文述語が何らかの形で ‘否定的’ である場合に限って、従属節内の *nibud'*-words が否定より狭いスコープをとれる点で共通している。

##### 4.2.2.1. 事態の評価を表す述語 2 (定節(*generic*) + 不定節)

このタイプの構文は事態の評価を表す点では前節で考察した構文と類似している。しかし、定節を補部を取る先の構文とは違って次のような特徴を持っている。

・述語が本来 *nibud'*-words を認可できる述語であるため、この構文では *nibud'*-words が否定より広いスコープも狭いスコープも取れる。

・*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈され得るためには主文述語が否定的な意味(評価)を表さなければならない。したがって、(74),(75)のように、述語が否定辞も否定的意味も含まない場合は、否定スコープ内の解釈がなく、否定より広いスコープの解釈しかない。言い換えるとこの構文では *nibud'*-words が否定スコープ内に解釈されるためには意味的に広義二重否定を含まなければならないとも言える。

また、以下の英語の(76)にも見られるように、英語に関しても同じことが言えそうである。一方、日本語に関しては、以下の例の訳からも分かるように、こうした構文では *ka*-words の否定スコープ内解釈は英語やロシア語に比べ、多少不自然ではあるもののやはり可能である。

(72) Ne kupit' *chto-nibud'* bylo prosto neudobno / stydno.  
 NEG buy what-*nibud'* was just awkward shame  
 何も(lit.何かを)買わないのはまずかった(恥ずかしかった)。

(73) Ottuda trudno / nevozmozhno uiti, ne kupiv *chto-nibud'*.  
 from\_there difficult impossible leave NEG buying what-*nibud'*  
 何も(lit.何かを)買わずにそこから帰るのは難しい(不可能だ)。

(74) Vpolne estestvenno bylo ne kupit' *chto-nibud'* (esli deneg  
 quite naturally was NEG buy what-*nibud'* if money  
 ne hvatalo).  
 NEG was\_enough  
 (お金が足りていなかったのなら、)何かを買わないのは自然だ。

(75) Bylo proshe uiti / ty mog by uiti, ne kupiv *chto-nibud'*.  
 was easier leave you could SUBJ.P. leave NEG buying what-*nibud'*  
 何かを買わずに帰ることの方が簡単だった(～ことが可能だった)。

(76) In terms of buying things I usually wait until I am in Rome or Paris. When you are there it is difficult not to buy something.

#### 4.2.2.2. モダリティを含む構文

まず、不定節補文を取る動詞によって表わされる modality 構文には *byt'*

*dolzhenym* 'must' 構文と *moch'* 'can' 構文がある。両方ともそれぞれ deontic modality、epistemic modality とともに表せるが、*byt' dolzhenym* 'must' 構文の方は主文にも補文にも同時に否定辞を使うことがほとんどなく(それ以外は振る舞いは同じである)、ここでは *moch'* 'can' 構文を中心に考察を行う。

*moch'* 'can' 構文の特徴 (〈i〉～〈iv〉) :

- 〈i〉 否定を含まない場合においては *nibud'*-words が認可される。
- 〈ii〉 主文否定の場合は *nibud'*-words が必然的に否定スコープ内に解釈される(cf. (79))。
- 〈iii〉 補文否定の場合は :
  - (a) 主文が否定を含んでいない場合は、以下の(77b),(78b)に見られるように *nibud'* -words が否定スコープより広いスコープしか取れない。
  - (b) 主文否定補文否定の場合は、deontic modality(cf.(77))、epistemic modality(cf.(78))のいずれでも、二重否定を含んでいる結果、意味的には「義務」(necessity)を表すことになり、いずれの場合も、*nibud'*-words は否定に対して二通りのスコープを取れるのである。

(77)a. Ja ne mog ne kupit' tam chto-nibud'.

I NEG could NEG buy there what-nibud'

私はそこで何かを買わずにはいられなかった。(lit.買わないことができなかった。)

b. Ja mog ne kupit' tam chto-nibud'.

I could NEG buy there what-nibud'

私はそこで何かを買わずにはいられなかった。(lit.買わないことができなかった。)

(78)a. On ne mozhet ne znat' chto-nibud'po etomu povodu.

he NEG can NEG know what-nibud' on this matter

彼はそれについて何かを(何も)知らないわけではない。

b. On mozhet ne znat' chto-nibud'po etomu povodu.

he can NEG know what-nibud' on this matter

彼はそれについて何かを(何も)知らないわけではない。

〈iv〉 PF での制限が観察される。

例えば以下の文のように、主文否定で、*nibud'*-words が主語である場合は、文の文法性が著しく下がって((79b)の *ni*-words と比較)、文法的にするためには、PF において否定辞より下の位置に下げないといけない(cf. 79c,d)。

- (79)a. ?? \**Kto-nibud'* ne mog skizat' emu ob etom.  
           who-nibud' NEG could say to\_him about this
- b. *Nikto* ne mog skizat' emu ob etom.  
       ni\_who NEG could say to\_him about this
- c. Da ne mog emu ob etom *kto-nibud'* skizat'.  
       EMP.P. NEG could to\_him about this who-nibud' say
- d. Emu ne mog ob etom *kto-nibud'* skizat'.  
       to\_him NEG could about this who-nibud' say  
       誰かがこのことを彼に言ったはずがない。

なお、主文否定補文否定の場合も同様な制限が見られる。要するに *nibud'*-words が主文否定辞より下に来なければならない((80a)対(80b))<sup>22</sup>。

- (80)a. \**Kto-nibud'* ne mog ne znat' ob etom.  
           who-nibud' NEG could NEG know about this
- b. Da ne mog ob etom *kto-nibud'* ne znat'.  
       EMP.P. NEG could about this who-nibud' NEG know
- c. Ob etom ne mog *kto-nibud'* ne znat'.  
       about this NEG could who-nibud' NEG know  
       このことを誰かが知らなかったはずがない。

なお、上の例のように、モダリティが動詞によって表されている構文とは別に、話者の命題に対する疑いなどの否定的な態度を表す *epistemic modality* を表している要素としては *vrjad li* 'scarcely/hardly'、*ne mozhet byt'* 'it can't be/ it is impossible'、*somnitel'no* 'it is doubtful'などもあげられる。

<sup>22</sup> また、こうした構文では *nibud'*-words のみならず、(ia)の例に見られるように、同節内の否定辞があるにもかかわらず、*ni*-words が非文法的である例もあって、語順に関しては普通 PFにおいて制限が見られない *ni*-words でも否定辞より下の位置に来なければ、文は非文法的となる。

それは、フォーカス構造による制限だと思われる。とりわけ、一般的に否定文において否定辞より前に来られるのはフォーカス要素か主題化された要素だけである。この際、構成素構造 (constituency)に関する制約がかかっている。つまり、構成素全体の移動のみが可能である。(ロシア語ではこの制約は破られることがあるが、この場合は当該の構造の複雑さがある、制約が厳密に働く)。(ia)は *ni*-word が主題化されている要素(*nikto ne znat' ob etom*)の一部として解釈される時に限って文法的であるが、そうした主題化されている要素が分裂されているので非文法的になる。一方、(ic)のように構成素全体を動かすと文法的である。

- (i)a. \**Nikto* ne mog ne znat' ob etom.  
       ni\_who NEG could NEG know about this
- b. Ob etom ne mog *nikto* ne znat'.
- c. *Nikto* ne znat' ob etom ne mog.  
       このことを誰かが知らなかったはずがない。



この場合もやはり、*nibud'*-words は否定に対して二通りのスコープを取れる。これは *nibud'*-words が否定スコープより広いスコープしか取れない、epistemic modality が肯定的な意味を表す副詞句によって表される場合(83)と対照的である。

否定がかかわらない、単純な推測等の epistemic modality は文中の位置が自由(cf. (83),(84))である副詞によって表され得るのに対して、否定的な態度を表す副詞は存在しない。これらの要素は、*vrjad li* のように、文中での位置が固定されている(文頭または主語の直前)か<sup>23</sup>、主節述語を形成し、それより下に来る構成素を補文に取る点に注意されたい。

(81) *Vrjadli on ne skazal ob etom komu-nibud'*.

hardly Q he NEG said about this to\_whom-nibud'

彼はそれについて誰かに言わなかったことはなさそうに思う。

(82) *Ne mozhet byt', chtoby on ne skazal ob etom komu-nibud'*.

NEG can be that.SUBJ.P. he NEG said about this to\_whom-nibud'

彼はそれについて誰かに言わなかったはずがない。

(83) *On ne skazal ob etom komu-nibud',skoree vsego.*

he NEG said about this to\_whom-nibud' faster of\_all

彼はそれについておそらく誰かに言わなかったでしょう。

(84) *On ne skazal, mozhet byt' ob etom komu-nibud'*.

he NEG said may be about this to\_whom-nibud'

彼はそれについて誰かに言わなかったかもしれない。

さらに、同じタイプの構文に以下のようなレトリックな疑問文を入れることができる。こうした構文においても *nibud'*-words は否定より広いスコープも狭いスコープも取り得るが、狭いスコープの方が無標である。

(85) *Kak ty mog ne kupit' tam chto-nibud'?*

how you could NEG buy there what-nibud'

どうしてそこで何かを買わなかったのですか?

上の構文も、広い意味で Baker(1970)のいういわゆる二重否定のケースにあたる可言えよう。

<sup>23</sup> *vrjad li* 'scarcely/hardly' も下に来る構成素を補文に取ると考えるのが妥当であるが(英語では 'I doubt whether...' といった構文によって訳せる)、具体的な統語分析は今後の課題としたい。

#### 4.2.2.3. その他の従属節、関係節

上の構文以外にも、何らかの形で否定が含まれている主文述語の場合は、従属節や関係節中の *nibud'*-words や *some*-words や *ka*-words が否定スコープ内に解釈され得ることが多い。こうした構文も、Baker(1970)のいわゆる二重否定のケースにあたるとみなせる。

ロシア語ではそうしたタイプの関係節では *subjunctive* の *by* が使われることが多いが、そうした時に *nibud'*-words は否定に対して二通りのスコープを取れる。それ以外の場合は *nibud'*-words は否定に対して狭いスコープしか取れない。また、そうした二重否定を含まない構文(86b)では *nibud'*-words が否定スコープ内に解釈されない。

- (86) a. V nashei gruppe net ni odnogo cheloveka, kotoryi by ne znal  
in our group NEG ni one man who SUBJ.P. .NEG know  
ob etom *chto-nibud'*  
about it what-*nibud'*

うちのグループにはこの問題について何かを知らない人はいない。

- b. \*V nashei gruppe est' chelovek, kotoryi ne znaet ob etom  
in our group be man who NEG know about it  
*chto-nibud'*  
what-*nibud'*

うちのグループにはこの問題について何かを知らない人がいる。

- (87) There was practically nobody in that class that didn't buy something from us.

- (88) There were very few times we didn't buy something.

- (89) Well, if you have 1,200£ to spare, you can claim your record, but you cannot be sure that somebody did not do it before or after you.

#### 4.2.3. その他の従属節

しかし、Baker (1970)の言う、「特別な述語」や「二重否定」によって解釈され得る節の他にも当該の要素を認可する節があり、本節ではいくつかを取り上げる。以下で挙げるタイプの節では *nibud'*-words の解釈が主節の意味に左右されないか、または、限られた文脈の場合のみ左右される(条件節)のである。

##### 4.2.3.1. 目的を表す節 :

*nibud'*-words は否定を含む目的を表す節において否定スコープ内に解釈され得る。この傾向は英語についても日本語についても見られる。

(90) Ja prosto hotel projasnit'situatsiju, chtoby u *kogo-nibud'* ne  
 I just wanted clarify situation in\_order\_to at who-*nibud'* NEG  
 slozhilos'lozhnogo vpechatlenija.

form wrong impression

私は誰か間違った印象を受けないように事態の説明をしたい。

(91) Just wanted to clarify so that somebody did not get the wrong  
 impression.

(92) 何かを忘れないように、ノートに書いておいてください。

#### 4.2.3.2.理由を表す節：

理由を表す *potomu chto* 'because' 節、*poskol'ku* 'as far as' 節においても *nibud'*-words は否定のスコープ内に解釈され得る。

(93) Oni vzjali na rabotu menja, potomuchto ne nashli *kogo-nibud'*  
 they took on job me because that NEG found who-*nibud'*  
 po spetsial'nosti.

on speciality

彼らは誰か専門家を見つけられなかったため、私を雇ってくれた。

(94) Recently one of my walking buddies got chased out of a coffee shop  
 because he didn't buy something.

#### 4.2.3.3. 条件節

*nibud'*-words が典型的に否定スコープ内に解釈され得る環境<sup>24</sup>の一つとして条件節があげられる。条件節を反事実条件文と通常の場合に分け記述する。

##### 反事実条件文

反事実条件文では文脈によって *nibud'*-words の否定スコープ内の解釈が排除されることがある。具体的に言うと、話者が条件節の命題の真偽について知識がなく、推測しているだけの場合は、主文の望ましさは関係していない。一方、典型的な反事实用法の場合は、話者にとっての主文事態の望ましさが問題になってくる。そして、主文事態が望ましくない、'否定的な' 事態を表している場合に限って、*nibud'*-words の否定スコープ内解釈が可能になる。

また、述語が「否定的な」意味をもつか否かは、明らかにその意味を含む

<sup>24</sup> もともと条件文では主節も条件節も *nibud'*-words を認可する。その際、*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈されるのは条件節においてのみで、主節では広いスコープの解釈しかない。

様な述語のタイプ(*u nas budut problemy* ‘we will have problems’ など)を除けば、ほぼ完全に話者の視点に立ったものであると言える。

例えば、(95)においても「仕事を任される」というのは話者が望んでいる場合も、避けようとしている場合も想定ができ、後者の場合はここで言う「否定的な」事態に当たることになる。

この例では *ni*-words が使われる場合は 4 通りの文脈を想定できる。一方、*nibud'*-words の否定スコープ内の解釈では 3 通りの文脈しか想定することができない<sup>25</sup>。

(95) Esli by *kto-nibud'* iz nih (nikto iz nih) ne  
 if SUJB.P. who-*nibud'* from them (*ni\_who* from them) NEG  
 soglasilsja vypolnit' etu rabotu, ee poruchili  
 agreed perform this job it would\_be\_charged  
 by nam  
 SUBJ.P. to\_us

彼らの中の誰かがその仕事を引き受けなかったら、私たちがそれを任されただろう。

典型的な反事実文の文脈としては次のようなものがある。

(i) 一つ目は、主文が話者にとって望ましくない事柄を表している、つまり、仕事を任されることを嫌がっている文脈である(実際には任されなかった)。そして、話者にとっては問題となっている人物の中に誰かが仕事を引き受けたと知っている上での発言である。(誰かが引き受けた結果、仕事を任されるのを逃れることができた。)

(ii) 二つ目は、主文が話者にとって望ましい事柄を表している。つまり仕事を任されることを願っていたが、実際には任されなかった場合である。そして、問題となっている人物の中の誰かが仕事を引き受けたと話者が知っている場合の発言である。(誰かが引き受けた結果、仕事をもらえなかった。) この文脈では *nibud'*-words が否定スコープ内に解釈されるのは不可能である(つまり、*ni*-words とは違って、その意味を表すことができず、否定辞より広いスコープで解釈されてしまう。(誰かが一人でも仕事を引き受けなかったら、その仕事を任されただろう。))

三つ目と四つ目は、話者が実際に他の人が仕事を引き受けたかどうかということについて知識を持っていない文脈である。

<sup>25</sup> *nibud'*-words が否定より広いスコープをとっている文脈も考えれば、さらに 4 パターンが可能になり、全部で 7 通りになるが、ここでは *nibud'*-words が否定より狭いスコープをとるケースだけを取り上げることにする。

〈iii〉三つ目は、話者が実際に他の人が仕事を引き受けたかどうかということについては知識を持っていないが、実際には嫌がっていた仕事を任されなかったという事実に基づいて、誰かが引き受けたという推測を行っている場合である。

〈iv〉四つ目は、実際に仕事をもらえなかったという事実に基づき、誰かが仕事を引き受けたらという推測を行っている場合である。

まとめておくと、話者が条件節の命題の真偽について知識がない場合は、主文の望ましさは関係していない。一方、典型的な反事実用法の場合は、話者にとっての主文事態の望ましさが問題になってくる。

なお、以下の(96),(97)のように、反事実条件文が未来の事態に対して話者の「評価」を表している場合は、以上で述べた条件は当てはまらない。とりわけ、*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈されるためには、(97)のように、主節が否定的な「評価」を表わさなければならない。(96)のように肯定的な事柄を表している例では、*nibud'*-words は否定より広いスコープをとる。

(96) Bylo by horosho, esli by kto-*nibud'* ne prishel.

was SUBJ.P. good if SUBJ.P. who-*nibud'* NEG came

誰かが来なければいいな。

(97) Bylo by uzhasno, esli by kto-*nibud'* ne prishel.

was SUBJ.P. awful if SUBJ.P. who-*nibud'* NEG came

誰かが来なければ、最悪の事態になったろう(lit.最悪だろう)。

反事実条件文での *nibud'*-words の否定スコープ内解釈の可能性(まとめ) :

- ・話者が条件節の事態の実現に関して結果に基づいて推測している場合は、常に可能である。
- ・話者が条件節の事態の実現に関して知識を持っている場合は、主節述語は話者(もしくは第三者)にとって好ましくない事態を表わさなければならない。
- ・条件節が話者の未来の事態に対する「評価」を表している場合は、主節が否定的な意味を表わさなければならない。

#### 通常の場合

通常の場合では、*nibud'*-words の二通りの解釈が可能である。典型的には主節が否定的な意味を表す例の方が多((95),(100)~(102))。しかし、適切な文脈さえあれば、条件節が望ましくない事態や事柄を表している場合でも(98)、望ましい事態の場合(99)でも、*nibud'*-words が否定スコープ内



でも解釈され得る<sup>26</sup>。(日本語に関しては(28)と(30)を比較)

通常の条件文では、反事実の条件文とは異なって、条件節の命題の真偽は話者にとっては常に不透明である。そして反事実条件文で見た通りこのコンテキストでは *nibud'*-words は常に二通りのスコープを取れるのである。

(98) Esli *kto-nibud'* ne priidet, u nas budut problemy.  
 if who-*nibud'* NEG come at us would\_be problems  
 誰かが来なければ問題になるでしょう。

(99) Esli do pjati *kto-nibud'* ne priidet, my smozhem uiti domoi  
 if by five who-*nibud'* NEG come we would\_be\_able go home  
 poran'she.  
 earlier  
 5時までに誰かが来なければ、早目に家に帰れるよ。

(100) He knew that if someone didn't come to help him, he might die!

(101) At the Beijing Zoo prices were so low it felt like losing money if I  
 didn't buy something.

(102) I would feel rejected if people didn't buy something.

なお、以下の例のように、条件文の中には主節の事態は話者にとってはある意味で評価に関し「中立的」である例(発話者の意志や間接的命令や決心や推測などを表しているような例)も多い<sup>27</sup>。

(103) Esli oni eshe ne priglasili *kogo-nibud'*, to puskai priglasjat.  
 if they still NEG invited who-*nibud'* then let's invite  
 彼らは、誰かをまだ誘っていないのであれば、誘うようにすべきだ。

<sup>26</sup> *nibud'*-words が否定より広いスコープの解釈は反事実条件文同様、制限がなく常に可能である。

<sup>27</sup> さらに、条件文は主文動詞、条件文動詞ともに不完了体である場合は generic な意味を表すことがある。同様に、generic な意味を表せ、*nibud'*-words を認可する構文には、*kogda* (when) 節を含む構文がある。この構文でも条件節と同じ意味で使われた場合、同様な現象が見られる。

(i)a. Ona obizhaetsja, kogda on ne darit ei *chto-nibud'* na Den' rozhdenija.  
 she get\_offended when he NEG give to\_her what-*nibud'* on day of\_birth  
 彼が誕生日に何かをくれないときには彼女はすねる。

b. Ona ne obizhaetsja, kogda on ne darit ei *chto-nibud'* na Den' rozhdenija.  
 she NEG get\_offended when he NEG give to\_her what-*nibud'* on day of\_birth  
 彼が誕生日に何かをくれないときには彼女はすねない。

(104) *Esli oni eshe i ne sokratili kogo-nibud', to vot vot sokratjat.*  
 if they still EMP.P.NEG fired who-*nibud'* then soon will\_fire  
 彼らはまだ誰かを首にしていなくてもそのうちするに違いない。

(105) *Zavtra posle raboty ja zaidu k nim v offis. Esli tam*  
 tomorrow after work I will\_drop to them in office if there  
*kogo-nibud'* ne budet, ja ostavlju zapisku.  
 who-*nibud'* NEG would I will\_leave a\_note  
 明日仕事の後彼らの職場による。そこに誰がいなければメモを残す。

なお、条件節での *nibud'*-words のスコープ解釈の可能性は主節が表わしている事柄の望ましさに因らないと述べたが、例外がある。それはまず、主節が以下の例のように話者の思考を表している構文である<sup>28</sup>。(106b)では、*nibud'*-words が否定のスコープ内の解釈は困難である<sup>29</sup>。

(106)a. *Ja (sil'no) udivljus', esli on komu-nibud' ob etom ne*  
 I strongly will\_be\_surprised if he to\_whom-*nibud'* about this NEG  
*skazhet.*

tell

彼がこのことについて誰かに言わなければびっくりする。

b. *Ja (sovsem) ne udivljus', esli on komu-nibud' ob etom ne*  
 I at\_all NEG will\_be\_surprised if he to\_whom-*nibud'* about this NEG  
*skazhet.*

tell

彼がこのことについて誰かに言わなければ、びっくりしない。

もう一つの例外は、反事実条件文について見られるのと同じようなもので、(107)のように主節が話者の未来の出来事に対する「肯定的評価」(「願望」)を表している場合は *nibud'*-words が否定のスコープ内に解釈されない。

<sup>28</sup>以下の例では、主節が悪い評価、望ましくない事柄を表しているわけではない。また、このタイプの構文では *nibud'*-words の解釈が主文の述語に左右される点は、話者の評価を表す構文 (Horosho / Ploho, chto on komu-nibud' ob etom ne skazal.)とは違う点に注意されたい。

<sup>29</sup> こうした振る舞いは思考動詞の *dumat'* 'think' との関連性をもとに説明できる可能性がある。「*udivljus'* 'be surprised' という動詞は意味的には「*ne dumaju* 'not think'」「*ne schitaju* 'not consider'」に置き換えられ、逆に「*ne udivljus'* 'will not be surprised'」は「*dumaju* 'think'」「*schitaju* 'consider'」に置き換えられる。そうすると、これらの文について、(106a)は[Ja ne dumaju, chto on komu-nibud' ob etom skazhet. ~私は彼がそれについて誰かに言うと思わない。]に置き換えられ、(106b)は[Ja dumaju, on komu-nibud' ob etom ne skazhet. ~私は彼がそれについて誰かに言わないと思う。]に置き換えられる。要するに、(106b)では否定辞が意味的に下の節で解釈されることになり、その際、単一節と同様、*nibud'*-words が否定辞より広いスコープしか取れなくなるのである。

(107) Ja budu ochen' rad, esli *kto-nibud'* ne priidet.

I would\_be very glad if who-*nibud'* NEG come

誰かが来なければ私はとてもうれしい。

#### 4.2.3.4. 忠告、願望

もう一つの *nibud'*-words が否定スコープ内に解釈されるケースとしては、いわゆる「忠告」やある事態が起こらないことに対する願望を表わす文<sup>30</sup>における用法を指摘できる。また、このコンテキストでは、一回きりの限界性のある動作は必ず完了体で表わされるのが特徴である。*nibud'*-words は否定より広いスコープを取れない。

一方、通常の命令形では、つまり、動作主が意識的に何かを行わないように頼まれている場合は、一回きりの限界性のある動作は基本的に不完了体で表わされ、*nibud'*-words は必ず否定より広いスコープを取る(cf.(109))。

(108) Smotri, ne kupi tam *chto-nibud'*.

look NEG buy there what-*nibud'*

何かを買ってしまわないように気をつけて。

(109) Ne pokupai<I> / \*kupi<P> tam *chto-nibud'*.

NEG buy buy there what-*nibud'*

そこで何かを買わないでください。

(110) Tol'ko by *kto-nibud'* ne prishel.

only SUBJ.P. who-*nibud'* NEG come

誰かが来さえしなければいいな！

以上の文に共通しているのは、話者にとって述語によって表わされている事態の成立が望ましくない点、そして話者がその事態に対して影響力がない(補文事態の実現を阻止できない)点([-controllable]<sup>31</sup>)が強調されていると言える。

<sup>30</sup> 「忠告」の例は未来形完了体の形を取る。「願望」の例は過去形の形をとり、意味的に未来に対しても現在に対しても過去に対しても使える。

<sup>31</sup> ここで言う [-controllable] は、動作主によるものではなくて(補文事態の動作事態は意志的に行われている動作も可能であるので)話者によるものである点に注意されたい。

#### 4.2.3.5. Wh-疑問文(*pochemu* 節)<sup>32</sup>

*nibud'*-words は Wh-疑問文の *pochemu* 'why' 節において認可される。Wh-疑問文に関して言うと、*nibud'*-words が否定に対して狭いスコープを取れるのは *pochemu* 'why' の場合だけである。*pochemu* 以外の Wh-要素の場合は *nibud'*-words は認可されない(cf.(112))。

(111)a. *Pochemu ty ne kupil tam chto-nibud'?*

why you NEG bought there what-*nibud'*

どうしてそこで何かを買わなかったの？

b. \**On ne kupil tam chto-nibud'.*

he NEG bought there what-*nibud'*

彼はそこで何かを買わなかった。

(112) \**Komu ty ne kupil chto-nibud'?*

to\_whom you NEG bought what-*nibud'*

あなたは誰に何も買わなかったのですか？

*pochemu* 節に関しては以下の〈i〉～〈iv〉の4点を指摘することができる：

〈i〉肯定形の *pochemu* Wh-疑問文では *nibud'*-words が認可されない(cf.(113))。この点では *pochemu* Wh-疑問文は他の典型的な Wh-要素疑問文と同じ振る舞いをしていると言える。

(113) \**Pochemu ty podaril ei chto-nibud'?*

why you gave to\_her what-*nibud'*

どうして彼女に何かをあげたの？

〈ii〉 *pochemu* 節において *nibud'*-words は義務的に否定スコープ内に解釈され、広いスコープの解釈はない。

<sup>32</sup> Wh-疑問文もあるが、Haspelmath(1997:121)にもあるように、そうした疑問文においては真偽が決まっていないことから、否定は中和している(以下の(ia)も(ib)も、(ic)の意味で使われている)ので、厳密な意味ではスコープ解釈に関しては論じることは難しい。しかし、分布としては疑問文における *nibud'*-words と *ni*-words の用法は完全に並行していて、同じ環境で同じ意味で使われることは事実として認めざるを得ない。

(i)a. *Ty ne videl kogo-nibud'?*

you NEG saw who-*nibud'*

b. *Ty nikogo ne videl?*

you ni-who NEG saw

c. *Ty kogo-nibud' videl?*

you who-*nibud'* saw

あなたはだれかを見ましたか？

〈iii〉 上述の通り、Wh-構文のうち、*kto* ‘who’, *kogda* ‘when’<sup>33</sup>の構文では *nibud’-words* が認可され得る。こうした疑問文では、否定が加わった場合、*nibud’-words* が基本的に否定より広いスコープを取るのである<sup>34</sup>。これは、*pochemu* 節での *nibud’-words* が常に否定スコープ内に解釈される分布とはコントラストを成す。

(114) *Kto chto-nibud’ ne ponjal?*  
 who what-*nibud’* NEG understood  
 誰が何かを分からなかったのですか?

〈iv〉 *pochemu* 節では通常の疑問文では見られないアスペクトの用法の違いが観察される。とりわけ、述語が表わしている事態は現在に関係していても、単純未来形が使われることがある<sup>35</sup>。この形は現在時制としては *pochemu* 以外の Wh-要素の場合や *pochemu* Wh-要素でも肯定文の場合などには使えない。(こうした構文では *ni-words* は使えない。)

(115) *Pochemu ty ne posovetuesh’sja s kem-nibud’ / \*ni s kem?*  
 why you NEG consult with whom-*nibud’* ni with whom  
 どうして誰かと(誰とも)相談しないの?

以上のことから、*pochemu* が Wh-要素である文は全体として「～すべきだった」といった内容を表していると考えられる。要するに、*pochemu* を Wh-要素として含む疑問文は全体として deontic modality の一種として振る舞っていると言える。しかし、その一方、*pochemu* 節は他の構文の中に埋め込むことができるが、その際、主節の意味が肯定的か否定的かに関係なく、そうした性質は変わらず、*nibud’-words* は認可され、必然的に否定より狭いスコープを取る。例えば、以下のような例では *pochemu* 節は従属節であるにも関わらず、そして *znat’* ‘know’は一般的に補文に *realis* の節を取るにもかかわらず、*nibud’-words* が認可される。なおこれらの例において *pochemu* 節で表わされている命題には necessity 「義務」の意味合いはほとんど感じられない。同様なことは英語の *why* 節についても言える (cf.(118))。

<sup>33</sup> *kogda* は否定と共に起した場合はレトリックな読みしかないのでここでは考察の対象外とする。

<sup>34</sup> こうした振る舞いはモダリティ要素が副詞によって表わされている文での分布と類似していて、構造的に上にある認可主によって認可が行われていることを意味している。

<sup>35</sup> この構文は補文節に明示的に subjunctive mood のマーカーの *by* を含む構文と類似している。

(i) *Pochemu by tebe ne pozovetovat’sja s kem-nibud’ / \*ni s kem?*  
 why SUBJ.P. to\_you NEG consult with whom-*nibud’* ni with whom  
 誰かと相談すればいかがですか?



- (116) Nikto ne znal, pochemu on tam *chto-nibud'*ne kupila.  
*ni\_who* NEG knew why he there what-*nibud'* NEG bought  
 彼があそこで何かを買わなかったのはなぜなのか誰も知らなかった。
- (117) Vse znajut, pochemu onatam *chto-nibud'* ne kupila.  
 all knows why she there what-*nibud'* NEG bought  
 彼女があそこ何かを買わなかったのはなぜなのか皆知っている。
- (118) I really wonder though why Russian government didn't buy  
*something* more utilitarian for its bad roads, such as a Toyota  
 Land Cruiser or a Land Rover.

#### 4.2.4. 反期待やフォーカスの小詞を伴った単文

英語の *some*-words とは違って、*nibud'*-words は単一節において否定より狭いスコープを取ることがほとんどない<sup>36</sup>。*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈されるのは、反期待やフォーカスの小詞などを含む単一節においてである。それは、例えば、話し手の期待や推測が結局叶わなかったことを表すような *tak i* 'after all' やフォーカス詞の *dazhe* 'even'、*tol'ko* 'only' などを含む節等である。なお、この場合は、*nibud'*-words の認可主が別になければ、必ず否定スコープ内に解釈される。

なお、これらの要素が含まれるコンテキストは、話者の態度を表すと考えることができる。

##### 4.2.4.1. *tak i* 'after all'

まず、*tak i* (*ne*)(after all)の例は意味的には話者の態度を表す含みがある。最も一般的にはそれは、以下の例のように *k sozhaleniju* 'unfortunately' といった残念な気持ちが含意されているが、逆に、*k schast'ju* 'fortunately' のような気持ちを含むこともある。

また、この構文では PF での否定辞との語順に関し制約が見られる。とり

<sup>36</sup> また、まれに以下のような文でも *nibud'*-word が文法的であるとする人もいるが、きわめて少数派で、基本的に例外であると言える。

- (i) Ja ne vstrechal tam *kogo-nibud'*.  
 I NEG met there whom-*nibud'*  
 あそこで誰とも会ったことがない。
- (ii) Ja ne videl tam *kogo-nibud'*.  
 I NEG saw there whom-*nibud'*  
 あそこで誰も見ていない。

わけ、以下の(119)(120)(121)からも分かるように、領域を限定する表現を伴った場合、主題化でき否定辞より前に来られるのである。例えば(120c)のように *iz nih* ‘from them’や(121c)のように *podhodjashego na tu rol’*といった要素を *nibud’*-words 句から外すと主語であっても否定辞より前に来られなくなる。

- (119)a. (K sozhaleniju), jatak i ne poznamilsja tam s kem-nibud’.  
 unfortunately I after\_all NEG got\_to\_know there with who-nibud’  
 (残念ながら)私はあそこで誰とも(lit.誰かと)知り合いになれなかった。  
 b. \*S kem-nibud’ ja tam tak i ne poznamilsja.

- (120)a. (Slava bogu), kto-nibud’ iz nih mne tak i ne pozvonil.  
 bless god who-nibud’ from them to\_me after\_all NEG called  
 (幸い)結局彼らの誰も(lit.誰かが)私に電話をしてくれなかった。  
 b. (Slava bogu), kto-nibud’ iz nih mne tak i ne pozvonil.  
 c. \* (Slava bogu), kto-nibud’ mne tak i ne pozvonil.

- (121)a. Ja tak i ne nashel kogo-nibud’ podhodjashego na etu rol’.  
 I after\_all NEG found whom-nibud’ suitable on this role  
 私は結局この役に誰も(lit.誰か)適切な人を見つけられなかった。  
 b. Kogo-nibud’ podhodjashego na tu rol’ ja tak i ne nashel.  
 c. \*Kogo-nibud’ ja tak i ne nashel.

#### 4.2.4.2. *dazhe* ‘even’ を含む節

フォーカス詞の *dazhe* ‘even’ を含む節では *nibud’*-words がたいていの場合現れることができる。

- (122) On *dazhe* ne podaril mne *chto-nibud’* na Den’ rozhdenija v  
 he even NEG gave to\_me what-nibud’ on day of\_birthday on  
 etot raz.  
 this time  
 彼は今回私に何らかの誕生日プレゼントさえくれなかった。

このコンテキストにおいても、*nibud’*-words に関して PF での語順に関する制約が見られるが、先のコンテキストとは違う。とりわけ、*nibud’*-words は *dazhe* より狭いスコープを取らなければならない<sup>37</sup>。一方、否定辞につい

<sup>37</sup> 以下の例のように、話し言葉では強調文において *nibud’*-words が *dazhe* より前に来ることが

て言う、PF では *nibud'* -words が否定スコープ内にある方が自然ではあるが、(123c),(124c)の文法性からも分かるように、義務的ではない。

(123)a. \**Kto-nibud'* dazhe ne pozdravil menja s Dnem rozhdenija.  
 who-*nibud'* even NEG congratulated me with day of\_birthday

b. Menja dazhe ne pozdravil *kto-nibud'*s Dnem rozhdenija.

c. Menja dazhe *kto-nibud'*s Dnem rozhdenija ne pozdravil.  
 誰も私に誕生日のお祝い言葉さえかけてくれなかった。

(124)a. \* On *chto-nibud'* dazhe ne podaril mne.  
 he what-*nibud'* even NEG gave to\_me

b. On dazhe ne podaril mne *chto-nibud'*.

c. On dazhe mne *chto-nibud'* ne podaril.  
 彼は私に何かプレゼントしてくれさえしなかった。

#### 4.2.4.3. *tol'ko* 'only' を含む節

*tol'ko* 'only' というフォーカス詞が文中にあった場合は、*nibud'*-words が認可される。なお、同様の働きが *edinstvennyi* 'sole', *odin* 'one' (修飾している名詞と格・性で一致しなければならない) といった形容詞によっても得られる。

(125) *Tol'ko* / odna Natasha ne kupila *chto-nibud'* v tom magazine.  
 only one Natasha NEG bought what-*nibud'* in that shop  
 ナターシャだけがあの店で何かを買わなかった。

(126) Mne odnomu on ne podaril *chto-nibud'* na Den' rozhdenija.  
 to\_me one he NEG gave what-*nibud'* on day of\_birthday  
 彼は私だけに誕生日に何かをくれなかった。

(127) Eto byl edinstvennyi chelovek, kotoryi ne rasskazal ob etom  
 this was sole man who NEG spoke about this  
*komu-nibud'*.  
 to\_whom-*nibud'*  
 それは誰かにそれについて話さなかった唯一の人だった。

できる。

(i) Eh ty! Kakoi-*nibud'* podarok dazhe ne kupil. A eshe drug nazyvaetsja!  
 well you which-*nibud'* present even NEG bought and still friend be\_called  
 友達のくせにプレゼントさえくれないなんて!

また、上述の要素や他のフォーカス要素などを含んでいない文においても、*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈される例は見られるが、それは、以下の例や上の例のように、後に形容詞か他の修飾句が続く場合や *nibud'*-words 自体が形容詞的 Wh-要素をもとに作られた場合がほとんどである。また、多くの場合は相手の確認を要求する *zhe* 'after all' や *ved'* 'you see'などを伴う。

(128) U nas prosto ne bylo *kakogo-nibud'* podhodjashego predloga dlja  
 with us just NEG was which-*nibud'* suitable pretext for  
 etogo.  
 this

私たちにはただ何らかの適切なきっかけがなかっただけである。

(129) Ja zhe / ved' ne kupila *chto-nibud'* nenuzhnoe.  
 I after all you-see NEG bought what-*nibud'* useless  
 私は何かいらないものでも買ったわけではないから(lit.買わなかった)。

また、英語でも同様の傾向が強いと言える。多くの例は *some* -words を修飾するような要素があるという点では共通していると言える。

(130) I didn't buy something that is 50% off the original price. I got something that is only 20% off as the whole store was giving 20% to 50% off.

(131) It's all going to fit after the baby is born, I didn't buy something I can't wear again.

一方、日本語に関して言うと、単一節では *ka*-words が否定スコープ内に解釈されるのは不可能であると言える(以上で挙げた例の訳も参照)。

(132) #彼女は結局そこで何かを買わなかった。

## 5. 考察

本稿が取り上げた *nibud'* -words が否定スコープ内に解釈され得る構文については、話者により実現可能ととらえられていた事態の不成立という共通面があり、Baker(1970)のいう *double negative* や、Horn(1989)のいう *metalinguistics negation or second-instance of negation* 環境という捉え方自体は間違っただけではないと言える。

ただし次の三つの点を考慮すると、それを可能にする基本的なメカニズム

は共通しているにせよ、問題とする個別の PSI について、どのような場合に否定スコープ内解釈が可能になるかは、言語間で、また一つの言語内でも個別の語彙項目や構文ごとに違いが見られ、仮に例えば文間での entailment 関係をもとにした Baker(1970)の条件を考えた場合でも、それはあくまで必要条件で十分条件ではないと言えよう。

- ・同じく話者の予測や評価などが表されている場合でも、副詞として表わされている場合は、主文述語として表されている場合に比べ、*nibud'*-words の認可がきわめて困難である点
- ・必ずしも人称の違いや、節が主節か従属節かの違いによらず同様な効果が得られる場合がある点(例えば 4.2.1.節の「特別な述語(special predicates)」の構文や 4.2.3.5.節の *pochemu* 節等における *nibud'*-words の否定スコープ内解釈可能性は、人称や時制等に因らないことを示した)
- ・ロシア語と英語、日本語の間では一見類似した構文であっても *nibud'*-words の否定スコープ内解釈の可能性に関して違いが見られる点

続いて、当該の PSI の認可可能性に大いに影響を与える要因として、それぞれの言語でのメタ言語否定の使用可能性が挙げられる点について論じる。

本稿では、Horn(1989)に従って、論理的には *nibud'*-words の否定のスコープ内の解釈は可能である、つまり、統語的な制限がないと考える。しかし、実際には *nibud'*-words は限られた文脈でしか否定より狭いスコープを取らないのが、次の (i) と (ii) により説明できると思われる。

- (i) ロシア語(日本語)の PF の重視
- (ii) メタ言語否定の有標性

まず本稿では Horn(1989)に従って、当該構文はメタ言語否定の一種であると考えられる。その根拠としては当該の構文での副詞の分布が挙げられる。

*nibud'*-words が否定のスコープ内に解釈され得る構文の例に共通しているのは、副詞の分布が通常の単文とは違う点である。とりわけ通常否定のスコープ内に現れない副詞が当該の構文では否定スコープ内に解釈される。

第一に、*opjat'* 'again' といったような、単一節では必ず否定の外側に解釈される副詞が当該の構文において、否定のスコープ内に解釈されることがある。

- (133) On *opjat'* ne kupil pomidorov.  
 he again NEG bought tomatos  
 彼は又トマトを買わなかった。



(134) Horosho, chto on opjat' ne kupil pomidorov.

good that he again NEG bought tomatos

彼は又トマトを買わなくて良かった。

第二に、同じことを時間副詞の *uzhe* 'already' についても言える。単一節否定文では、限界性動詞の場合は *uzhe* は非文法的である。一方、例えば、条件節について見てみると、肯定形では通常の文と用法は変わらないが、否定が加わった場合は *uzhe* の用法が変わってくる。*nibud'*-words が否定のスコープ内に解釈される読みでは、*uzhe* の使用が可能で、否定のスコープ内に解釈される。一方、*nibud'*-words が否定辞より広いスコープを取る場合は、*uzhe* は非文法的である。また、これと対照的に、*ni*-words が文中にあった場合は、単文と同じ分布が見られる。

(135)a. On uzhe prishel.

he already came

彼はもう来た。

b. \*On uzhe ne prishel.

he already NEG came

(136)a. Esli on uzhe komu-nibud' ob etom ne soobshil, u nas  
if he already to\_whom-nibud' about this NEG informed at us  
budut problemy.

will\_be problems

彼はこのことをすでに誰かに報告していなければ、問題になる。

b. \*Esli on uzhe nikomu ob etom ne soobshil, u nas budut  
if he already ni\_to\_whom about it NEG informed at us will\_be  
problemy.

problems

なお、条件節以外の他の構文に関しても同様なことが言える(次の例を参照)。

(137)a. Nadejus', chto on uzhe ne kupil tam chto-nibud'.

I\_hope that he already NEG bought there what-nibud'

彼はあそこですすでに何かを買っていないと信じたい。

b. \*On uzhe ne kupil tam chto-nibud'.

he already NEG bought there what-nibud'

彼はあそこですすでに何かを買わなかった。

まとめておくと、過去形における *opjat'* 'again' や *uzhe* 'already' は単純文では肯定としか共起できないのに対して、当該の構文では、*nibud'*-words が否定のスコープ内に解釈される場合は、文法的である場合が多い。一方、*nibud'*-words が広いスコープを取る読みでは分布は単純文と同じである。

以上のことから、*nibud'*-words が否定のスコープ内に解釈される節では、論理的には否定のスコープ内に解釈されるものの、内部構造は肯定文と同じであると言える。

なお上の(i)「ロシア語(日本語)の PF の重視」に関しては次のことが言える。

ロシア語(そして日本語)ではデフォルトで NegP の位置は PF 通りに解釈される。これはいわば無標の解釈である。しかし、従属節、関係節などにおいては、PF に関する制約が緩くなる。その根拠としては次の点を挙げられる。

- ・ロシア語は比較的と語順の自由な言語であるにもかかわらず、否定辞がかかった場合は、上述の通り、否定辞との位置に、またはフォーカス詞との位置に関して *nibud'*-words がそのスコープ内にないといけないという制約が見られることがある。

- ・上述の通り、*k sozhaleniju* 'unfortunately' などの副詞が文中にあると、Baker(1870)のいう含意を作れるはずだ(そして英語ではそうした環境では *some*-words が否定のスコープ内に解釈される)が、それだけではロシア語では同様の意味の従属節と同じ現象が見られない。

- ・ロシア語では、当該の構造でのフォーカス構造は単一節とは異なる。ロシア語と日本語では単純否定文ではフォーカスは述語(polarity)に当たる。それ以外の要素はフォーカスになれない。例えば、以下の(138a)の例は(138b)や(138c)の意味で解釈することが不可能である。一方、*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈され得る節においては、否定のフォーカスを他の要素に当てることができる。(139a)を(139b)の意味で解釈できる。

(138)a. On ne kupil chasy v Parizhe.

he NEG bought watch in Paris

彼はパリで時計を買わなかった。

b. On kupil v Parizhe ne chasy.

he bought in Paris NEG watch

彼がパリで買ったのは時計ではない。

c. On kupil chasy ne v Parizhe.

he bought watch NEG in Paris

彼が時計を買ったのはパリではない。

(139)a. Zhal', chto on ne kupil chasy v Parizhe.

pitty that he NEG bought watch in Paris

b. Zhal', chto on kupil chasy ne v Parizhe.

彼が時計を買ったのはパリではないのは残念だ。

一方、<ii>「メタ言語否定の有標性」に関しては、上述の通り、当該の構文は機能的にはメタ言語否定のものであるが、そもそもメタ言語否定が使われるコンテキストは通常否定が使われるコンテキストよりも限られている。また、一般的にメタ言語否定は旧情報を対象としているが、通常、旧情報になるのは現実世界において対応指示物があるものであり、旧情報としては本来[-realis; -specific]な命題が現れることはめったにない。

なお、メタ言語否定は専用の形式によって表わされる場合と、旧情報中の特定の要素を主題化させた上でその要素に間接的に焦点を当てる場合(この点については詳しく Evseeva(2006)を参照)とがある<sup>38</sup>が、ロシア語のように文法化した形式を持たない言語では、本質的に複雑な後者の方が使われる。

要するに、[-realis; -specific]な素性を持つ不定表現が否定より狭いスコープを取るような構造は複雑で、有標である。

他方、否定と共起する[-realis; -specific]な素性を持つ専用の不定表現が存在している(英語: *no*-words, *any*-words ロシア語 *ni*-words, *libo*-words)。

そうした専用の形式を使わずに、あえて肯定文で使われるような[-realis; -specific]を取り入れたメタ言語否定を使うのには、強い動機が必要である。そして有標な使い方は特別な意味のために使われることがよくある。この場合、それは背景にある推測、気持ち、願望などであると思われる。

## 6. まとめ

本稿では、ロシア語 *nibud'*-words が認可される、nonspecific irrealis 環境としてどのようなものがあるかをまず記述し、さらに、先行研究で見逃されていた、否定スコープ内で *nibud'*-words が解釈される環境としてどのようなものがあるかについても詳しく記述した。その上で、何がそのような分布を示させるのかに関し、[-realis; -specific]特徴にもとづく LF での認可という基本条件に加え、一つには、<i>i</i> フォーカス構造を背景にした PF 制約

<sup>38</sup> そのうち、メタ言語否定用の文法化形式内では、当該要素が問題なく生じる。例えば、反駁・訂正といったメタ言語否定用に「ワケデハナイ」といった形式を発達させている日本語(例えば Horn(1989:501)は、“The external or wide-scope reading of negation is forced by the metalinguistic negator *wake de wa nai*”と記述している)では[-realis; -specific]な素性を持ちうる不定表現、*ka*-words が否定スコープ内に自由に生じ得るし、否定スコープ内解釈は義務的である。

(i) その店で何かを買ったわけではない。

の存在、もう一つには、〈ii〉ロシア語否定辞の無標スコープ範囲である述語否定を拡大し、強 NPI の *ni* -words や弱 NPI の *libo* -words のような否定環境用専用不定表現が存在するにもかかわらず、わざわざ *nibud'*-words を用いメタ言語否定を行うことの有標性、という機能的観点からみた二つの動機の存在を中心に考察を行った。

#### 略号一覧

ACC	accusative	<P>	perfective
EMP.P.	emphatic particle	PL	plural
GEN	genitive	Q	question
<I>	imperfective	SUBJ.P.	subjunctive particle
NEG	negation		

#### 参考文献

- Baker, C. L. 1970. Double negatives. *Linguistic Inquiry*, 1:169-186.
- Brown, S. 1999. *The Syntax of Negation in Russian: A Minimalist Approach*. Chicago: Stanford: CSLI Publications.
- Brown, S. and S. Franks. 1995. Asymmetries in the scope of Russian negation. *Journal of Slavic Linguistics* 3:239-287.
- Evseeva, E. 2006. 「否定文におけるフォーカス構造の実態 —日本語・ロシア語文の観察をもとに—」『京都大学言語学研究』25:217-255.
- Farkas, D. F. 1997. Dependent indefinites. In Corblin, F., D. Godard, and J. M. Marandin, eds. *Empirical Issues in Formal Syntax and Semantics*. pp. 243-267, Peter Lang Publishers.
- Giannakidou, A. 1998. *Polarity Sensitivity as (Non)Veridical Dependency*. Amsterdam: John Benjamins.
- Haspelmath, M. 1997. *Indefinite Pronouns*. Oxford: Oxford University Press.
- Hasegawa, N. 1991. Affirmative polarity items and negation in Japanese. In Georgopoulos, C. and R. Ishihara, eds. *Interdisciplinary Approaches to Language: Essays in Honor of S.-Y. Kuroda*. pp. 271-285, Dordrecht: Kluwer.
- 服部匡 1989. 「「ない」による否定の作用について」日本言語学会第 98 回口頭発表
- Horn, L. R. 1989. *Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.

- Horn, L. R. & Y.-S. Lee. 1995. Progovac on polarity. *Journal of Linguistics*, 31: 401-424.
- Klima, E. S. 1964. Negation in English. In Fodor, J. A. and J. J. Katz, eds. *The structure of language*. pp. 246–323, Englewood Cliffs: Prentice Hall.
- Kratzer, A. 1998. Scope or pseudoscope? are there wide scope indefinites? In Rothstein, S. ed. *Events and Grammar*. Dordrecht: Kluwer.
- Ladusaw, W. 1980. On the notion "affective" in the analysis of negative polarity items. *Journal of Linguistic Research* 1:1-16.
- McGloin, N. H. 1976. Negation. In Shibatani M. ed. *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. pp. 371-419, New York: Academic Press.
- Pereltsvaig, A. 2000. Monotonicity-based vs. veridicality-based approaches to negative polarity: evidence from Russian. In King, T. H. and I. A. Sekerina eds. *Formal Approaches to Slavic Linguistics: The Philadelphia Meeting 1999*, pp. 328-346, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications.
- Pereltsvaig, A. 2008. Russian *nibud'*-series as markers of co-variation. In Abner, N. and J. Bishop eds. *Proceedings of the 27-th West Coast Conference of Formal Linguistics*, pp. 370-378. Somerville, VA: Cascadilla Proceedings Project.
- Progovac, L. (1994) *Negative and Positive Polarity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reinhart, T. 1997. Quantifier scope: how labor is divided between QR and choice functions. *Linguistics and Philosophy* 20:335-397.
- Restan, P. 1969. *Sintaksis voprositel'nogo predlozhenija*. Oslo: Universitetsforlaget.
- Tatevosov, S. G. 2002. *Semantika sostavljajushchix imennoj gruppy: kvantornye slova (The Semantics of the Constituents of the NP: Quantifier Words)*. Moscow: IMLI RAN.
- Yanovich, I. 2005. Choice-functional series of indefinites and Hamblin semantics. Presented at SALT 15, UCLA.
- van der Wouden, T. 1997. *Negative Contexts: Collocation, Polarity and Multiple Negation*. New York: Routledge.
- Zwarts, F. 1995. Nonveridical contexts. *Linguistic Analysis* 25:286-312.



## On the distribution of Russian *nibud'*- words

EVSEEVA Elena

### Abstract

In previous studies, Russian *nibud'*-words have been characterized in several ways: i) as a sort of PPIs (positive polarity items) which typically occur in non-specific irrealis contexts, ii) as dependent variables which require their domain variables of various semantic types (individuals, situations, worlds, etc.) and so forth. None of them, however, did not explicitly refer to the possibility that, in some *emotive* contexts where the situation can be considered as “contrary to” or “out of” an experiencer’s preceding emotive state(’s continuation), they can co-occur with a clausemate Neg element with narrow scope interpretation relative to Neg. As such ‘meta-linguistic negation’ uses of *nibud'*-words are abundantly found in Russian in fact, previous studies’ descriptions should be said insufficient and need to be supplemented with a fuller description and a more satisfactory explanation for their distribution. (This is a summary of chapter two.)

Then in chapter three, the distribution of Russian *nibud'*-words are described in detail both in various non-negative contexts and in various negative contexts. Finally in chapter four, an analysis is proposed for their distribution by paying attention mainly to the following two functional aspects. First, as Russian *nibud'*-words must satisfy a focus\_structure-based PF constraint in addition to the licensing requirement from some [-realis; -specific] element at LF, possible positions and contexts in which they occur are constrained. Second, though their wide scope interpretation relative to negation is not prohibited in principle, the existence of other special form indefinites (i.e. *ni*-words and *libo*-words; strong Negative Concord items and weak Negative Polarity Items) and the Russian Neg particle(*ne*)’s basic scope property (i.e. predicate negation) have resulted in very limited uses of narrow scope *nibud'*-words in negative contexts (i.e. only in ‘meta-linguistic negation’ contexts in a sense).

(受領日 2009年6月30日)  
(受理日 2009年11月10日)